
異界って楽しいか？

如月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界って楽しいか？

【Nコード】

N2820T

【作者名】

如月

【あらすじ】

最強！チート！でも戦うのは嫌だ！平凡万歳！ という主人公が異世界で頑張るかもしれない話です。主人公は基本的に厄介事は嫌だ、でも巻き込まれたら最後まで！、です。

自分の意思？で異世界へ

今日もいつも通りに家へ向かう。今俺は巳等高校から帰っている途中だ。

家から学校まで自転車で通っているが、それでも四十分はこぎ続けなければいけない。

最初は嫌だ嫌だと思ったり、受験する時に家から学校までどれだけ遠いのかも調べずに受けた俺も馬鹿だと思っていたが、さすがに二年も通い続けられ慣れるもんだ。

どうでもいいけど、風がものすごくムカつくのは俺だけだろうか？
風が向かい風の時は進まなくて困る。
遅刻しそうな時はなおさらだ。

「ただいま」

と言っても家にはだれもいない。両親は仕事が忙しく、夜遅くまで帰ってこないからだ。

二階に上がり自分の部屋のドアノブに手をかける。

……………。

ボタン！！

閉めた。

野原だ。

……おかしいおかしいおかしい。ドア開けたら野原って……。俺のドアはいつから空間を超えるようになった？……いやいや、まだ俺の目の錯覚かもしれない。そう思いまたドアを開ける。ただし静かに、ゆっくりとだ。

ガチャッ

「……………」

ですよねー、変わるはずないですよねー。

……いや、変われよ！！そういうのいらなから！！マジで！

「っと、おお！？なんだなんだなんだ！？」

ドアに文句を言うという一生しないであろう馬鹿な事をやっている
と

身体が何かに引っ張られる感じがする。これって……………？

「まさか…………？俺このまま野原へダイビング？」

いやいやいや！！ヤだよ！？俺は何かつかむ物がないかと周りを
見てみるが何も無い。

何も無い！？

ならばと俺はとっさに後ろへ駆け出す。すると駆け出した瞬間目
の前に野原へと続いたドアが現れる。

「へ！？へ！？嘘！？ ちょっと…………ま」

人は急には止まらないって全くその通りだったよ。考えた人すこ

いな。

俺は呑気にそんな事を考えながら自分から野原へ続くドアへと入って行った。

神の意外な才能？

ドアをくぐって野原に出た俺はすぐに戻ろうとふりむく。
しかしすでにそこには野原がある（森が見える）だけでドアは無
くなっていた。

「うええ！？あれ！？どこいった！？」

あわてて手で探ってみても空を切るばかり。ありませんね、ハイ。
しかも今気付いたが俺は靴を履いていない。つまり足の裏が小石
とか踏んで痛い。

……………どーでもいいな、そんなこと。人は理解不能事が起きる
と考えるのを放棄して

別の事（どうでもいい事）を優先的に考えるらしい。
……………それこそどーでもいいな。

「ダメだ、頭がまともな思考回路じゃ無くなってる。落ちつけ、俺
とりあえず何か役に立つ物が無いかと身体を探ってみる。
するとポケットに携帯電話と折りたたまれた紙があった。

「なんでこんな所に携帯が……………？」

いつもこんな所にいれないので訝しみながら開いてみると案の定
【圏外】の文字が。

まあこれは予想していたのであまり驚かない。…………少しへこむが。
それより問題はこの紙きれた。

開いてみると誰かの携帯番号らしきものが書かれていた。

「かけるって事か？……いやでも携帯圏外なんだけど」

とはいっても他にできる事が無いので携帯に番号を打ち込む。

ブルルルルルル……

あれ、繋がった？

『はい、こちらなんでも相談所です。お名前をどうぞ』

「……………草波 まさや、です」

『草波様ですね、承っております。少々お待ち下さい』

いきなり名前を聞かれたので思わず答える。俺はやっと名前を言えた事に安堵しつつ

なんでも相談所ってなんだ？と考える。するといきなり女の子の声が聞こえてくる。

『よつすー！待たせたね、ごめんごめん。で、草波君だよー！答えは聞いてない！！』

「……………」

突然何を言い出す？

『ちよっ……………、無言はやめて！変なこと口走ったのは謝るから！』

「……………誰ですか？」

『テンションひっくいねー！もっとあげてごうよー！』

あ、俺ダメだわ。この人とは合わない。根本的に。

「すみません、チェンジできます?」

『え、何が?』

「別の人はいませんか?」

『チェンジってあたし!? うーん、……………いい

よ!』

「すみませんねえ」

『気持ち込めて言ってるないね!?』

しばらくすると誰かに変わったのか説明口調で言ってくる。

『もしもし、変わりました』

「……………」

『どうしましたか?』

「……………変わったのって口調だけですよね!？」

変わったのは口調だけで話してる人は変わってない。あれ?俺ち
やんと日本語でいったよな?

別の人はいませんか?」

『そつだよう!よく分かったじゃん!えらいえらい!』

「すみません、俺あなたのテンションについていけません。大丈夫
ですか?」

『ハハツ大丈夫大丈夫!勝手に話進めるからさ』

「……………そつつすか。なら質問なんですけどあなたは誰ですか?」

『おおつ、いきなり来るねえ。まあいいけど。あたしが紙d……………ご
ほつごほつ、あたしが神だ!』

なんで言いなおした?

「へー」

『やだなあ、トリビ〇の泉じゃないんだからさ！もっと驚かないの？』

「驚きつて一周回ると冷静に変わるみたいですよ」

『ナルホド！だからそんなに冷静なんだね！！』

ちよっ……………この人のテンションなんかなんないの？耳元で叫ばれるとうるさくてしょうがない。

俺いつもはもっとボケにまわる方みたいなんだけど……………。（友達談）

『そろそろ本題に入ろうか。もっとふざけたいんだけど……………。読者様も飽きてくるだろうし』

「あの、言葉を選んでくれませんか？なにを言ってるのか分かりません」

『ああ、敬語は使わなくていいよ。いつもどおりで』

「電話切るぞコノやるー！」

『いきなり！？差が大きすぎるって！』

「……………本当に本題に入ってくれないか？切れちゃうかもしれないから」

『携帯？電池ないの？』

「いや携帯じゃなくて俺が」

『あ、ああ。君がね……………。上手いじゃん！！携帯が切れるのと君がキれるのとかけるなんて』

……………もっ、いいよな？

「すみません、切りますね」プッ

……………ふう、つかれた。こんな短い時間でこんなに疲れたのは初めてだ。

ある意味才能じゃないのか？人を疲れさせるの。こんな八夕迷惑な才能ってあったんだな。

「空って……………こんなに蒼かったんだ……………」

ふと見上げると青々と広がる広大な空が。俺は地面に大の字になる。地面は草があるので大丈夫。

ああ……………いやされる……………。このまま寝ちゃおうか？

そのままつとつととしてくる。

ブルルルルルル……………

「……………」

神じゃありませんように神じゃありませんように神じゃありませんように神じゃありませんように！

呪文のように何度も言いながら携帯をしてみる。

（神）

「ですよー……………死ねよ神^{ほそ}」

話が進まない……

俺は仕方なく耳に携帯をあてる。

『「うらあー……！！急に切るな！！」』

いきなり怒鳴られた。まあこうなることは分かっていたので携帯はすぐに耳から離しておいた。

俺ナイス！！

「なに？疲れてるんだけど」

『なに、じゃない！携帯は急に切るなって親に教わらなかったの！』？』

「教わってないけど」

『だろうね。でもね草波君。少し考えれば分かるでしょ？』

うつぜえええ……。聞き分けのない子供に教える様な口調で言いやがった！

「あの、ホントもういいから。マジで本題に入ってくんない？」

『そうだったね。忘れてた忘れてた、ごめんごめん』

「……………忘れてた？」

『あ、嘘嘘。忘れてないよ？』

「おまえ数秒前に忘れてたつつつたる。頭大丈夫か？」

『大丈夫だよ！？伊達に神やっついてないから！』

「……………」

『……………』

『……………本題に入ろっか』

「……頼む」

このままだと関係ない話ばかりしそうで怖い。

『さつきあたしは神って言ったよね？……言ったっけ？』

「言った。言ったから続ける」

『じゃあ次に、分かっているとと思うけど君が今いるのは地球じゃない。別の世界だよ』

「ふむ」

『やっぱりって感じだね。それに冷静だし。あ、あれか！驚きは一周回ると冷静になるってヤツ！』

「それはいいから次」

『せっかちななあ……。せっかちな男は嫌われるよ？あ！せっかちといえね……』

ヤバい！また話がずれる！

「すとつぶすとつぶ！話が脱線し始めてる！戻れ戻れ！」

『あ、ごめん。で、どこまで話したっけ？』

「別の世界、って所まで」

『ああ、そうそう。その世界は剣と魔法の世界。科学の代わりに魔法が発達したって考えればいいよ。』

でね、魔物もいるんだ。動物⇨魔物ってこと。違うのは魔物も魔法を使うって事。

もちろん人も使えるよ』

人？ 種族は人間の他にもいるのか？エルフとか獣人とか。

「種族って人間だけなのか？エルフとかって……」

『いない。人間だけだよ。で、なんで君にその世界に来てもらった

かって言うこと……』
「言うこと………?」

デヘデン！

「さて、今あなたは一千万円の問題に挑戦できます。
この問題に正解すれば見事一千万円が入ります！しかし、外
れば賞金は無し！

あなたは挑戦しますか………?」

「おい、なんだこれは?」

挑戦しますか………?」

「いや、しません」

では問題です!!」

「おい！俺今しませんって………」

神があなたを異世界に送った理由は次の内どれ?

- A 神の暇つぶし (思いっきり暴れちゃえ!)
- B あなたにこの世界を任せます (君が神だ!)
- C 歪みを治して (がんばれ)

D この世界のバグをこらしめて。(まあ適当にボロっちゃって！)

調子にのってるからさ

さあ、どれ!?

「……………」

さあ、どれ!?

「えっと…………じゃあこで 正解!!!」

「ええ!?! 正解言うの早いな!!!」

ツハ!?!…………なんだ今のは!?! のもんだ?………… いや、まさかな。

「やったじゃん!!! 一千万円獲得だよ! これでお金には困らないね」

「おい、今のは一体なんだ?」

「え? 分かりやすくしようとかイズ形式でやってみただけ…………。緊張感あつたでしょ!」

「いや、全く」

「ええ!?! なんだあ、つまらないなあ。あ、一千万円はこの世界でのお金ね」

「そ、そうか…………。って歪みってなんだよ?」

「歪みってのはその世界に出来た不完全の塊みたいなものかな?」

基本的に害は無いんだけどあつてはならない物だからね、それを

消してほしいんだ』

「害がないんなら別にいいじゃないか？ほおっておいても」

『うん、まあね』

「それに消してほしいって言われてもどうやって消すかもわからないぞ」

『あ、やってくれるの！？いや、ありがとう！』

「い、いや別にやると決めたわけじゃ……」

『君に真力をあげるからそれを歪みにぶつければいいだけだよ。そうすれば消える』

そうすれば消えるって……。やるとも言っていないし真力ってなんだ。

それにこいつが真面目に話をするとう違和感がハンパない。

『真力ってのは神の力の劣化版みたいなものだよ。ついでに言うと魔力の代わりにもなるんだ』

「俺にも魔力があるのか？」

『うんにゃ、これっぽっちも。ゼロ。無い。カス。ツ……しよぼっ』

「人を罵倒した挙句に最後のはおまえの感想だろうがぁ！！」

『まあまあ落ちついて。そのくらいで怒っちゃだめだよ。カルシウム取りな。』

あ、でもその世界には牛乳無いからこっちから送ってあげようか？二日に一本でいいよね！』

……………。

真面目に話し始めたと思ったらこれだよ。

それに話の内容が全然進んでない。これはダメだ。あっちは今一人で関係ない事をべちゃくちや

しゃくしゃくしてさ。

……やっぱり疲れた。

竜王って強そうだよな

「もしもし」

『それでき、……………だったんだ！……………でも、』

ダメだ、聞いてない。一人で延々としゃべり続けている。

でもこのままだとこっちが暇なのでそろそろ止めさせる。

どのくらい一人でしゃべり続けられるか調べてみたい気がするが……………。

……………いや、しねーよ。なに考えてんだ、俺。

とりあえず神に大声で叫ぶ。そうすりゃさすがに気づくだろう。

「もしもし！……！」

『うわっ！？な、なに！？どうしたの！？』

「どうしたって……………。そっちが自分の世界に入っちゃったから連れ戻したんだ」

『っ、連れ戻した？なに言ってるの？』

「いや、別になにも。それより話の続きをしてくれ。真力がどうのって所から」

『ああ…………、そこまで云ったんだっけ。』

まあいいや、君には魔力が無いから代わりに真力をあげようと思っ
つてね。

1000000000くらいでいいよね?』

「い、一億…………?多いのか少ないのか分からないけど」

『めちやくちや多いよ。真力の1が魔力の100なんだから』

1〓100? ってことは真力の一億は魔力でいうと……………百
億!?マジか!

『ついでに言うと、その世界の一般人の魔力が500くらい。歴代
最高は6000だよ。』

君は一人で大陸の人全員と戦えるってこと。もしかしたら世界中の
人でも敵わないかもね』

「……………」

『…………ん?足りないならもつとあげるけど……………?』

「…いや!…いい、いい!十分だ!お腹いっぱいだ!」

…………んん?そんなに真力があっても魔法の呪文が分からないんじ
やだめじゃないか?

それに近づかれたら手も足もでないだろうし。

「なあ、魔法の呪文が分からないんだけど？それに俺近づかれたら即オダブツだろ」

『それなら大丈夫だよ。魔法は創造で造ればいいし、近接戦闘術も君の頭に直接入れておくから』

「も、妄想具現化能力？いや、創造か」

『？ あと君の好きな武器はある？槍とか刀とか銃とか大剣とか…』

「なんで？」

『歪みは真力を流したあたしの創った武器じゃなきゃ壊せないんだ』
『よ』

「……うーん……、やっぱり刀、か？」

大剣は重すぎて使えないだろうし、槍も近づかれたら不利だろうしなあ……。

『うい、刀だね』

神がそう言うと、いきなり目の前が歪んで一振りの刀が出てくる。

「おわっ！！」

いきなり出てきたからビックリした。俺は浮かんでいる刀を手に取りる。

ズシッと重みが伝わってくる。鞘を抜いてみると黒い刀身が出てきた。

……………これは、黒刀？

『それは黒刀・闇夜だよ。名前がアレなのはほつといて。

特別な素材を使つてあるから折れることはまず無い。

それに君が斬りたい物だけを斬ることが出来る。

逆に言えば何も思わなければ何も斬れないって事。

あとオマケに重さを変えられるようにしておいた。遠隔操作もできるからね』

「つまり他の人が使つても斬ることは出来ないって事が」

『そうそう！君だけの刀だよ。まあ別の武器を使いたければ創造で造ればいいしね』

「ああ、気になってたんだけどその創造って規制はあるのか？」

『創造は君の真力を元にして出来るから基本なんでも造れるよ。

真力の1を使つて一つ造れるから、一億個造れるって事。魔法もね』

つまりチート。

『それから身体能力も上げておくよ。でも強すぎるからリミッターかけとくから。』

危なくなったら解除しなよ。それとその刀も邪魔になるなら別空間に閉まっておきな。

創造で造れるよ』

なんか人間から外れていつてるような……。死ぬよりはマシだろうけど。

『それからギルドに入っておきなよ、いろいろ便利だからさ。』

あ、ギルドってのはなんでも屋かな？説明するからよく聞いといてね。

自分や村で解決できない事が起きるとギルドに依頼するんだ。

その依頼を冒険者、つまり依頼を成功させて得た報酬で生きていく人達が受けるんだよ。

冒険者にはランクがあつてね、E〜SSまでがある。

まあでもSSランクなんて歴史上に4人だけだ。

で、自分のランクの一つ上の依頼までしか受けちゃいけないんだ。特例はあるけど。無暗に死なれるとギルドも困る

からね。

最初は誰でもEランク。ランクを上げるには二つ上の依頼を二つ成功させるしかないよ。

「……………こんなところかな？」

「なるほど。SSランクってどんなのがあるんだ？護衛とか？」

『護衛なら一国の王女とか王の護衛だね。他には魔物の討伐とか。』

ただこのレベルの魔物は災害級や天災級だけど。大陸中の国が連合して討伐するくらいだよ。

『君とどっこいどっこいかな？』

天災って……………。俺とどっこいどっこいな訳ないだろ。普通に俺負けるし。

『災害級の魔物は神獣とか、名前を挙げるとドラゴン。それでドラゴンの頂点が竜王』

「それはいい。竜王とか名前聞いただけで戦意そがれるから。戦うことなんて無いだろうけど」

『いや、あるよっ？』

「……………」

……ん？俺の耳って空耳まで聞こえる様になってたのか？それとも俺が年？

っはは、まさか。まだ十七だぞ？ぴちぴちの高校生だ。じゃあ空耳じゃない？

いやいや、なら幻聴だろう。……だよな？

「悪い、もっかい言ってくんない？頭が聞いたことに拒否反応を起こしたからさ。」

俺が竜王と戦う事があるって聞こえたんだ。さすがにそれは……

……

『だからあるって。歪みが竜王のテリトリーにできちゃったんだ。歪みを消しに行くって事は竜王の巣の中に入るって事だから当然竜王は邪魔者を消そうとするよね』

「……………」

『……………がんばー！ー！』

……………俺オワタ〜（＾o＾）ノ

『まあでも気を落とす事でもないよ』

「……………なんで？（ぼ

そ）」

『しっわっ！っくらっ！っ』

「……………で？」

『あ、うん。覇気をあげるからさ、それでなんとか頑張つてよ。いざとなつたら助けるし』

「……………覇気？ 三種類の覇気？」

『うんそうだねって……………何気に三つ全部要求してるね』

しょうが無いだろ！！竜王って俺の中ではとんでも無いイメージだぞー！！

覇気をもらってもまだ足りなくらいだ！

『よし、こんなところかな！！いや、やっと説明し終わったね！！』

「おまえが前半ふざけるからだろ！」

『それほどでも』

「言語理解能力ちゃんと備わってるか？」

『しっつれいな！ あるに決まってるでしょ！ げんご……………なんたらっていつの』

「そうかそうか、無いか」

『はあ、もういいよ！じゃあ切るからね』

「おう、じゃあな〜」

『追記、この携帯で神といつでも連絡できます』

……この携帯電源切っておくか。

リアル逃走中……？

さて、……………どうしよう？

携帯の電源を切ったのはいいがぶっちゃけどこに向かえばいいの
か全く分からない。

しかしこのままというわけではいかないのでとりあえず森へ歩き
だす。

「……………あれ？」

ふと思った。今の俺の服は制服だが、この世界でこの服装はおか
しいかもしれない。

あやしまれるかもしれないから隠した方がいいかもな。

「創造で造れるか？」

立ち止まって全体を覆い隠せる灰色のローブを思い浮かべる。
するといきなり目の前に黒いローブが現れる。

「おわっ！ ……………できた？」

俺は出てきたローブを着てまた歩き出す。

ブルルルルルルルル……………

「……………」

電話？え、電話？電源切ったのに？

「もしもし」

『あ、もしもし！さっき伝え忘れた事なんだけどね、その世界の一年は

元の世界の一日だから！あと、歪みを全部無くしたら元の世界に帰れるよ！

んじゃ！』プツッ

「……………そうですかい」

言いたい事だけ言ってすぐに切れた。俺は何故か電源が入っている携帯を

また切ってさっき造った異空間にしまう。ちなみにこの異空間は創造したら簡単にできた。

便利だな、創造。

|| || || || - - - || || || || ||

「おら、おつさと金目の物を出せ！…！どつなっても知らねえぞ！…！」

……今俺は山賊？みたいなものに囲まれている。しかも人数がかなり多い。

ざっと見ただけでも五十人はいると思う。

少し開けた所に出たと思うたら急に出てきて囲まれた。普通もつと身分の高そうな

人を狙うんじゃないの？こういうのって。

「何を考えてんだ？怯えて声も出ねえってか？」

一人の首領みたいな大柄な男が前に出てきてそう言うと、周りから笑いが起こる。

「……っち、まあいい。おい、こいつで何人目だ」

「確か五人目だったと。三人が女で一人が男です。男はもう奴隷としていませんが……」

そのまま俺が黙っていると大柄な男が近くにいた男に声をかける。それより俺で五人目ってどういうことだ？

「そうか、よしおまえ！！おとなしくしとけよ、そうすりゃ危害はくわえねえ」

俺は別の男に鎖で縛られる。

いつのまにか森の奥に行きすぎて迷子になってたら急におっかない人たちが出てきて……。

変なうす暗い所に閉じ込められちゃった。

「大丈夫、大丈夫だからね？」

「で、でも……」

「安心して、お姉ちゃんがついてるからね」

「そうです。まだあきらめちゃダメですよ」

周りにいる知らないお姉ちゃんが励ましてくれるけど……。

そのまま話したりしていると、ドアの向こうで足音が聞こえてきた。

「おら、ここに入ってる！妙な真似はすんじゃねえぞ！！」

「いってーな！もっと優しくしろよ！」

「ハア？男はそれぐらいでちょうどいいんだよ、クソガキ！」

誰か連れてきたみたい。男の………人？うす暗いからよくわかんない。

s i d e e n d

s i d e まさや

牢屋に連れて来られた俺は男に背中を押されて倒れる。

今は両腕だけ縛られているので動けないこともない。けど結構動きづらい。

ちなみに着ていたローブは山賊に取られた。しかも制服も一緒に取られて今は

ぼろぼろの服を着ている。

「はあ、ったく」

「あ、あの！誰かいるんですか？」

「ん？いるけど……？ああ、あんた達も連れて来られたのか？」

「はい、まあ……」

前を見るとうす暗くてよく分からないが三人の人がいるのが分かった。

山賊が言ってた人らしい。

「そうか、災難だったなあ」

「だったなあって……。落ちついてるんですね」

「あわてたってどうしようもないからな。それよりあんた達の名前は？」

俺は草波まさや。いや、マサヤ・クサナミかな……？」

「わたしはリリィ・フィルタス・スカーレットです」

「ふむ、そうか」

「え！？そうかって……。それだけですか！？」

「ん？驚けばいいのか？じゃあ……。なんだってー、あなたがあの「いや、もういいです」「む、そうか」

もしかして……。どごぞのお姫様とか？それが悪名高い女とか……。それはないか。

「もしかして……。わたしの事を御存じないのですか？」

「ああ、全く」

「そ、そうですか……」

「いやあ、悪いな。まさかとは思いますが……。王女？」

「そのまさかですよ……」

マジか！テンプレテンプレ。こんなところで王女と会うなんてな。

「あ、敬語使った方がいいか？」

「いえ、使わなくて結構です。 堅ぐるしいのは嫌いなので」

「ならいいか。そちらの二人は？」

俺は若干空気化していたもう二人の女の子に聞く。

「私はシルフ・マーリニアよ」

「あたしはリーア・フォールド！」

「リリイに、シルフに、リーアね。 そうだ、誰か村か国へどう行けばいいのかわかる？」

「あたし分かるよ！連れて来られる時に覚えたもん！」

「でもそれを聞いてどうするの？」ここから出られないじゃない」

「……………」

「？ とうしたんですか？」

「……………出たい？ここから」

「そりゃ……………出たいに決まってるじゃない！でも……………」

うん、じゃあ作戦？どつりにいくか！

「なら、一緒に逃げるか！」

「え？」

俺は異空間から闇夜を取り出して遠隔操作で操って繋がれた手を切る。

おお、本当に切れた。しかも豆腐みたいに。

ガシヤッ

「なに？今の音は？」

そのまま鉄格子を斬り裂く。スパッと簡単に切れる。そして出来

た隙間から出る。

「……え、ええ！？あああんだ、なんで？鉄格子は……」

「静かに。外に聞こえたら面倒だ」

「む！後で教えなさいよ！」

よし、じゃあ始めるか！

ぐだぐだ感がハンパない

檻を出て声のする方に目を向けるが暗いので三人が見えない。

「なあ、ちょっとこっちに来てくれないか？暗くてよく見えない」

「手錠で繋がれてて思うように動けないんです」

ああ、そうだったのか。なら、と俺は三人の顔が見えるように簡単な火の呪文を唱える。創造で呪文も聞かずにいきなり火の玉が出てきたら何か言われそうだからだ。

35

「灯れ、狐火」

ぼつと手の上に頭一つ分の火の玉が現れる。それでもまだ檻の奥まで

届かなかったので火の玉をさらに派生させる。

え、マジで！？結構普通にやっちゃったんだけど。そりゃ驚くわ。

「これは、まあ……あ、あれだよ、あれ！

なんか適当にやってたら出来ちゃった……みたいな？」

「あれってどれ！？しかも適当って……聞かれても困るんだけど！」

「じゃ、じゃあ……遺伝！ そう、遺伝で！」

「じゃあって何よ？しかもそんな遺伝聞いたこと無いし」

「ええ？ああもう、ならそっちで決めてよ。それにするからさ」

「あれ！？急にどうした！？」

この話題がめんどくさくなってきただけです。だってどうでもよくね？

できたらできたで わあすごい、でいいじゃん。

「とにかく！～できるんだからしょうがない！～ってことで。

それはそうと、ここから逃げるから動くなよ」

「え？ああ、そうだったねっ……って、どうやって逃げるのよ？」

手錠とか檻とか。それにここ地下でしょ？連れて来られた時階段

下りたし」

「（さりげに話題を変えましたね……）」

「（あれ？あたしってまた空気？）」

「手錠と檻はなんとかするから他は後で考える」

手の上で浮かんでいたちっちゃい太陽？をそこらに浮かべる。
そして左手に持っていた闇夜を鉄格子に円を描くように滑らせる。
それだけで鉄格子は何の抵抗なく斬れた。
人一人分通れる間ができたのでそこから中に入る。

「さつきも思ってたんですけどその黒いのは何ですか？」

「これは刀つってな。断ち切る事を目的とした武器だよ。叩き斬るより断ち切る。」

ただ、使うには技術が必要だからあまり使われないんだよ」

この様子だと刀はこの世界に無いようなのもっともらしい事を
言っ。

おれは三人の手錠を斬って自由に動かせるようにする。

「それにしてもすごい切れ味ですね……。それに綺麗です」

「見てみるか？」

「え？いいんですか？」

「時間はたっぷりあるし。はい」

「あ、私も！」「あたしも見たい！」

リリイに闇夜を差し出すとおそろおそろ受け取って眺め始める。
他の二人も横から覗き込んでじっくり見ている。初めて見るから
珍しいんだろう。

「これって何の材料で出来てるの？それに全然斬れないじゃない。
さっきは斬ってたのに」

「材料は分からない。バカ（神）から渡されたからな。
あと斬れないのは使ったのが俺じゃないから。そいつは俺しか
斬ることが出来ないんだよ」

「持ち主を選ぶんですか」

「らしいなあ」

リリィが言ったことに同意する。よく分からないので適当に合わせる。

「はい、ありがとうございます」

「うん」

シルフから闇夜を受け取る。鞆に納めるとキンツという音が響く。
……俺この音好きなんだ。なんていうか、こづ……ねえ？

40

え？分からない？俺だけですか、そうですか。

「じゃあ脱出……する前に、その……服、どうにかするか」

さつき闇夜を渡す時に気づいたんだけど、三人の服が所々破けて少し……エロい。

リーアはまだ小さいから良いんだが、シルフとリリィは美少女だ

「はい、これを着ろ」

「……………その袋どうなってるの？絶対に入る大きさじゃないでしょ」

「あれこれこーなってる」

「……………つまり？」

「魔法で中を広くしてあるんだよ。」

でも時間は変わらないから生モノはだめ」

「後半はいららないですね」

「即答しなくても……………」

なんか緊張感ないなあ……。あとリーアが完全に空気だ。

「じゃあ俺向こう見てるから着替えな」

「大丈夫ですよ、上から着ますので」

「そ、そうか……………」

くそッ 少し期待したつてのに！

「で、これからどうするの？」

「ここは地下なんだろ？なら、俺に考えがある」

そう言って俺は天井を見上げた。

脱出成功

まず何処に人がいるのか、何人いるのか知りたいので、神からもらった覇気を使ってみる。

でもどう使えばいいのか分からなかったのでとりあえず集中してみた。

「……………」

「？何やってるんですか？」

「……………」

「マサヤさん？」

「……………」

「……………む」

すると周りの声、気配が強く感じるようになり、何処に何人いるのか分かる様になる。今自分のいる建物の形も頭の中に浮かんできた。

どつやらここは地下一階らしい。賊の気配は建物の

中に十人ほど感じられる。

「……………ふう」

ふと目を開けると目の前にシルフの顔が。

「うわっ!」

「あ、気付いた」

「近いよ!?!」

「はあ?あんたが話しかけても無視するからじゃない」

無視?集中してただけなんだけどな…。

「でも、何してたの?」

「久しぶりにしゃべったな、リーア。
探査魔法を使ってたんだ。賊が何処にいるか知りたかったから」

本当は違うんだけど同じ様なもんじゃないか？

……いや、違うか。覇気は先読みできるもんな。

「でも大体わかったし、行くか」

独房を抜け出すとすぐ横に上へ続く階段があったので

音を立てないように上っていく。途中でいくつかドアがあったが何もしないで通り過ぎていく。

……あのドアのどれかが俺の空間越えドアにつながってないかな…。

しばらく歩いていると後ろからついてきていたリリイが話しかけてきた。

「あの、どんどん進んでるんですけど道分かるんですか？」

「いや、でも壁の向こう側が外なら壁を壊せば外に出られるだろ。つとここらでいいか」

「でも壊したら大きな音が鳴って気付かれませんか？」

「……あ」

「……………確かに」

急に音がすれば逃げ出した事がバレるだろうし。

錬金術はどうだ？いや、でも……………よくね？
それでいいじゃん。扉を作ればいいし。

「じゃあ壊すのはやめるか。別の方法でやる。
みんな下がってる」

「お兄ちゃん何するの？」

「……………」

お兄ちゃん……………だと？

「悪いリア、なんだって？」

「お兄ちゃん何するの？」

「すまん、前半聞こえなかった。もう一回」

「お兄ちゃん」

「後で頭なでてあげるからあと一回」

「本当！お兄ちゃん！」

「あ、急に耳悪くなった。

聞こえずらかったからもっかい」

「しょうがないなあ……。お兄ちゃん！」

「あんたお兄ちゃんって呼ばれたいだけでしょ！」

む、悪いか！憧れだったんだぞ！一人っ子の俺としては！
一度でいいから言われてみたかったんだよ！

「はあ……………」

「何よ」

「分かってないなあ、シルフさんよ。一人っ子か妹の
いない男はそういう事を言われたいもんなんだよ。
これだからゆとりは」

俺は若干ドヤ顔で言っただけ。

「分かるわけないでしょそんな事！それとそのムカつく顔を今すぐやめて！」

腹立つから。あとゆとりって何！！」

「ちょ……………声が大きいです」（小声）

「あつ……………」（小声）

「へっ、怒られてやんの」

「い、いの……………」

「二人ともいいかげんに！」（小声）

「…いめん」

「そつだな、続きは外に出てからだな」

「続けるの！？」

「シルフお姉ちゃん、静かに！」（小声）

「い、いめんねっ」

リーアに言われるシルフを見て「ふっ」つと鼻で笑ってやる。そして静かに怒りながらこっちへ向かってくるという器用な事をするシルフを、リーアとリリイが二人で止めているのを横目で見ながら手を合わせる。

合わせた手を壁につけると電気みたいなものが出て、その後大きな扉が現れた。

「……………は」

「よし、行こう」

何か聞いたそうだったがさすがにこれ以上ここにいるのはまずいので

先に扉をくぐる。外に出られたので空を見るとオレンジ色だった。

すでに日が沈み始めてるみたいだ。

あとから扉をくぐってきたリーアに聞く。

「リーア、村までどのくらいかかる？」

「え？んつとね、歩いて一日くらいかな？」

「だとしたら今夜は野宿ですね」

「まあ、しょうがないわね」

「あれ？平気なのか？」

「いえ、でも脱出できたので贅沢は言ってもらえないかな……と」

「……たくましいな。シルフは？」

「……フンっ」

あ、怒ってる？なんか自分、今不機嫌です！みたいな感じが……。
……やっぱりからかいすぎたか？

「えーと、怒ってる？」

「……」

「無視はちよっと……」

「……」

「いや、悪いな？からかって」

「……」

「機嫌直してほしいなーっと思ってる……ん、です……けど」

「……」

あ、これ本気で怒ってるかも。

「……なんでもするから」(ぼそ)

「なんでも?」

あるえ!?今の聞こえたの!?自分でも聞こえないくらい
だったんだけど!?

「え?あ、……やっぱり無し」

「はいい?な・ん・で・もって言ったよね?」

……怖い。

何が?って……目が笑ってないんだよ!目だけが!
元々美人だから笑うとめちゃくちゃ可愛いのは認める。
でもな、だからこそ怖い!

つく、小説で読んだ事はあるけど、自分が体験するとは……。

「い、言いました」

「うん、分かった！じゃあ行こうか、リアちゃん！」

「うん！」

俺が承諾した途端に喜色満面になった。

なんか嬉しくてしょうがないってかんじに。さっきとは大違いだ。リアもつられてか分からないけど笑顔になっている。

53

「マサヤさん」

「ん？」

リアとシルフが手をつなぎながら先を行くので付いていく。すると歩いてる途中にリリィが話しかけてきた。

「私にもなんでもするって言うってくれませんか」

「……………なんで?」

「じゃあ、なんでもするって言うか、頭をなでてください」

「なんで!?!?」

「さあ、早く。どっちかです」

なにその二択? 頭でもかゆいのか?

いや、自分でかけるだろ。でも俺がなでてても良い気分にならないだろうし。

……………そもそもなんで選ばなきゃならんの?

「……………なんでもする」

「む」

「ん?」

「いえいえ、なんでもないです」

なんかリリイがムツとしたような……………??

ま、気のせいだろ。女の子は会ったばかりの男に
簡単になでられたくないだろうし。

そのあと、リリイはリーアとシルフと一緒に先行し始めた。
女の子三人だから話すこともあるんだろうけど……。
俺は男一人だけだからさびしい。あ、ごめんキモいね。

そのまましばらく歩くと日が落ちてしまったので適当な場所で野宿
することになった。

神は意外と凄かった！

しばらく歩くとちょうどいい所があったのでそこで野宿することに。

ちなみにリーアは今俺が背負っている。

歩いている時に疲れたらしく、俺に「おんぶ！」と言ってきたからだ。

しかもすやすやと気持ちよさそうに眠ってしまった。

とりあえず明かりがほしいのでリーアをリリイに預けて周りに落ちている

乾いた葉や木の枝を拾う。

ある程度集まったところで簡単な火の魔法で火をつける。

そして火を囲う様にして座る。

「……」

「……」

「……」

き、気まずい……。

誰も話したさなからいつの間にか変な空気になった。

「あ、あの、山賊がわたし達を探しに来ないでしょうか？」

しばらくたつてリリイが話題を見つけたのか話しかけてきた。
「勇気あるな……。」

「あ、確かに」

「誰が見張っておけばいいんじゃないの？交代しながら」

「そうだな、なら最初は俺がやるよ」

「あ、そうですか？じゃあお言葉に甘えて」

「あとさすがに地べたはダメだからな。これ使え」

俺はさっきの袋から毛布を一枚取り出して二人にわたす。

「ありがとう。ってこれ……すごいさわり心地いいわね。」

「高かったんじゃないの？」

「ん？いや別に」

毛布は俺の世界の毛布を創造したから多分この世界じゃ
ここにある二枚だけだろう。

たぶん魔物の毛皮はそんなに柔らかくないんだろうな。

「ねえ、あんたって強いの？」

武器を持つてるんなら戦えるんでしょ？

魔法は何の属性が使えるの？」

ふと疑問に思ったのかどんどん聞いてくるシルフ。

「まあそこそこなら戦えるぞ。ギルドには入ってないけどな。属性は火と水は使える」

「へえ、ギルドに入ってないんだ。入ってるかと思ってたのに」

「ああ。まだ旅を始めたばかりでな。道に迷ってた時に山賊があらわれたんだ」

と、適当な事を言っておく。

「シルフは？」

シルフに聞くと何故か自慢げに話した。

「ふふん、私はギルドランクAよ！使える属性は風と土！
どっつ？すごいでしょー！！」

「なにが？」

「なにが！？AよA！」

「へー」

「反応小さくない！？それでも二つ名持ってるのよ！」

「どんな？」

「光明！！」

こゝ、光明？また微妙な……。

「二つ名を持ってるんですか！」

黙って話を聞いていたリリイが驚く。

「え？なに？二つ名ってそんなにすごいの？」

「二つ名知らないなんて……。
どんな所にすんでたのよあんた」

「悪いな、田舎で。ギルドなんてなかったんだよ」

これは本当だ。地球にギルドなんてなかったしな。当たり前だけ
ど。

「あのですね、マサヤさん。」

二つ名というのはギルドマスターに認められた人だけしか持てな
いんです」

「じゃあかなり凄いつてこと?」

「そうなりますね」

「ふ〜ん、じゃあよっぽど強いんだろ？」

なんで山賊に捕まったんだ?」

「そ、それは……………その……………」

急にうつむいてごにょごにょ言い出すシルフ。
声が小さくて聞こえない。

「なんて?」

「……………つたから」

「はっきり言ってくれ」

「だ、だから！寝てたらいつの間にか捕まってたのよー！」

「ね、寝てた？」

「そうよー！」

「ギルドランクAで二つ名まであるのに？」

「う、うるさいわね…」

「————ハンッ」

「は、鼻で笑った！？笑う事ないでしょ！？」

「あ、悪い悪い。思わず」

「ま、まあまあ落ちついて下さい。

仕方ないですよ、そういうこともありますって」

「そ、そうね……」

「……いや、無いと思っけど」

「あなたは黙ってなさい！」

「……」

そうして話している内にシルフとリリィは横になって
眠ってしまった。俺は眠るわけにはいかないので起きているけど。

62

しかし眠い……。

まぶたがとてつもなく重く感じる。

なので俺は創造で眠くなくなるといっつこの現象を創造。
するとさっきまでの眠気が嘘のようになる。

さすが創造便利だ、なんて思っているよ、

ブルルルルルッ

「……………」

「この音は携帯か……………」。
携帯は異空間にしまっただけであるはずなのに音が聞こえてくるとはな
……………。
なんでもアリか。

仕方なく携帯を取り出して通話ボタンを押す。

「もしもし」

『もしもしこんばんわ！みんなのアイドルの神だよー！』

「……………やっぱりおまえか」

『やっぱりって、あたしどこしか通じないじゃん！』

「いや、別の神かもしれないだろ。むしろ別の神であってほしかった」

『で、今回は君に新しい能力をあげようと思ってね』

スルか。

「新しい能力？いいよもう。十分チートだし」

『いや、手伝ってもらってるんだし、竜王と戦つかもしれないし。念には念をとってね！』

「え、竜王ってそんなに強いん？」

『そりゃつよいよ。魔法はほとんど効かないし、つろこは刃を通さないし、普通の人間なら睨まれただけで気絶しちゃうし、魔法は全属性使ってくるし。』

でも時間と空間はさすがにないけど。

動く速さも圧倒的だし。並の人間なら気づいたら死ぬだろうね』

「ちよっ……やめて！勝てる気無くす！」

『別に倒さなくてもいいけど。』

まあそんなわけだからこちらとしても歪みは消してほしいから』

「ぜひとも下さい！」

『なんで敬語？まあいいけど。』

あらたな能力は、造られたものを完全支配する ってやつ』

？ 完全支配？造られたもの？ってどういうことだ？

『例えば敵が魔法で君に攻撃してきたとするよ。』

その魔法は敵が造った魔法でしょ？

だから君はその魔法を支配して逆に攻撃できるってこと』

「俺に魔法は効かないってこと……」

『まあそうだね。魔法じゃなくても敵の持っている武器も造られたものだから君が操れる』

「……………」

『でも限界はあるよ。』

操れるのは君の確認できるものだけ。

ま、目に見えない魔法も「例えば風の魔法」君が認識出来れば支配できるけどね』

つよすぎんだろ！そこまでやっちゃう？

なんだか人間の枠を完全に超えている気がしてきたな……………。

『それじゃね！ちなみにあたしは創造神、創世の神、なんて呼ばれてるよん。』

どじっ？すごいっしょー！『プシッ』

「え……………」

マニマニ

初めての戦闘がラスボス級ってどうよ 1 (前書き)

どうも、如月です。

もう一つの作品をすっぱかしています。すいません！

とりあえず読んでくださってありがとうございます。

初めての戦闘がラスボス級ってどうよ 1

電話をしまった後火を音を立てないように消す。

このまま付けていたら山賊に見つかるともかもしれないからだ。まあでも覇気があるから誰かが近づけばすぐにわかるけど。

「……………なにか来るな」

覇気で探ってみると二十匹くらいの狼？の群れがこちらを警戒しているのがわかった。

暗くてよく見えないが夜にまぎれて襲ってくるつもりなんだろう。しかも完全に囲まれている。

68

「頭のいい魔物だな。」

逃がすつもりは無いってか」

けど、こっちも簡単にエサになるつもりはないんでな。

悪いけどあきらめてもらおうか。

「……………マサヤ」

シルフが起きたのか横になりながら話しかけてくる。

多分魔物の気配で起きたんだろう。

「ああ、シルフ。起きちゃったか」

「
気づいてるの？」

「まあな。それよりあの魔物ってつよいか？」

「暗くて全然見えないわよ。」

「見えるんだったら特徴を教えてください」

「体長はリーア位。目が三つあるな。」

「色は黒で四足歩行。あと一匹だけ大きいのがいる」

「なら多分バーウルフってやつよ。ランクはC。」

「一匹だけならそんなに強くないんだけど、数が多いとAランクになるわ。」

「それと大きいヤツは群れの頭よ」

「なら、そいつを殺ればいいのか？」

「一番強いのを倒せば群れはもろいってよく聞くし。」

「そつなんだけど……。できるの？」

「位置は分かってるからなんとか」

「簡単に言っわね……。」

それが難しいからランクAなのよ？」

「子分が親玉まで行かせないってか？」

あいにく俺にはそんなこと関係ないね」

俺は霸王色の覇気を大きいやつにピンポイントで放つ。

するとすぐに気絶した事がわかった。

周りにいるバーウルフすべてを気絶させなかったのは後始末に困るから。

「？ 何かしたの？」

「今、大きい奴を気絶させたよ。」

頭がやられたのが分かったら他の奴も逃げ出すんだろ？」

「はあ！？え、だってなにも……。」

ガバツとシルフが起き上がる音がする。

驚いて思わず起き上がったみたいだ。

「したよ。威圧して気絶させたただけだけど」

「威圧……？？そんなの、聞いたことない……。」

この様子だとこの世界に覇気は無いらしい。
あつたらあつたでいろんな意味で困るけど。

「……………逃げたみたいだ」

……………話している間にいつのまにかバーウルフの気配は消えていた。
覇気で辺りを探ってみるとかなり遠くに行っていた。
ついでに他にも魔物がいないかと集中してもいなかったの
でしばらくは大丈夫だろう。

「ほらシルフ。まだ朝には時間があるから寝てろ。
交代はいいから」

「……………威圧したってのは後で聞くからね。
でもマサヤは寝なくていいの？」

「全然眠くないんだよ。
俺のことはいいから寝な。ちゃんと朝になったら起こす」

「そつ？じゃあ遠慮なく……………」

しばらくすると三人分の寝息が聞こえてきた。
ちゃんと寝たみたいだな。

太陽がでてきた。

あのあと何も起きずに日が明けてきた。

山賊が襲ってくるかと思っただけで覇気を広げてたけど

結局何もなかった。

………つまらん。

その時。

広がっていた覇気の範囲に、こっちに猛スピードで向かってくる物体が入ってきた。

「……………?」

なんだ?と思っただけで覇気を集中してみる。

するとそこに鮮明に見えたのは緑と黒が合わさったような気味の悪い巨体。

実際に見たことは無いが、地球では空想上の存在。

ドラゴン

圧倒的で暴力的なまでの存在が一直線にこちらに向かって来ていた。

「 やばい。 やばいやばいやばいやばい! 」

直接見なくても分かる。

あれは人間が戦っていい魔物じゃない。

とゆうーか見聞色の覇気で気配をより強く感じたから余計に分かってしまった。

しかも俺達を狙ってやがる!

なんでよりによって俺達を……………?

とにかく三人を起こさなきゃまずい!

「 おい、みんな起きろ!! 早く!! 」

「 ん……………、なに? うるさいなあ…………… 」

「 うるさくてもいいから! 」

「 むにゃ……………、へへへえ…………… 」

「 リリイさん!? なんつー笑い方を……………! じゃなくて!! はやく起きて! 」

それとよだれ垂れてる！

「まだ……もうちょっと」

「リーア！？」

もうちょっとしたらドラゴンのお腹の中だぞー！…」

俺がドラゴンと口にしたら。

「」「」「どらごん？」「」

ぴたつと。

三人の動きが一瞬とまった。

「そうー！どらごんー！」

なんで平仮名？と思ったけどそんな事はどつでもいい。
早くしないと。

初めての戦闘がラスボス級ってどうよ 1 (後書き)

ここまで読んで下さり有難うございます！
なるべく早く更新したいです。

シルフが必死に声を絞り出して答える。
声が震えているのは殺気による純粹な恐怖からだろう。

「ランク……………S……………暴竜……………」

「もし、襲われたら?」

「……………あきらめる」

はぁん、なるほど。
どろぢらそこまで危険ってわけだ。

「
おもしろい」

「……………え?」

ふと口から出た俺の言葉にリリイが反応する。

「シルフ、悪いけど二人を頼む。被害が及ばない所に隠れてろ」

「　　っ!？」

「俺が戦う」

それを聞いた途端、シルフとリリイの顔が驚愕にそまる。
当たり前だと思う。竜のランクはSらしいからな。

魔物と人間のランクには差があり、ランクSの魔物はSランクの人間十人分に匹敵する。

そんな魔物に俺一人で挑もうって言うのだ。
命を捨てると思えない。

……………正直俺もかなりビビってるし。

でも。

恐怖と同時に俺の中ではもう一つの感情がわきあがっていた。

……………戦ってみたい。

目の前に空想上の動物がいるのだ。

とくに空手とか柔道をやっていたわけじゃないけど
頭の中にあらゆる近接戦闘術が入っている。

それに　　今の俺が何処までできるのか知りたいし。

いずれはドラゴンの頂点の竜王とかなんやらに挑むかもしれないんだ。

このくらいで死んでたら話にならない。

「む、無茶です……………」

「無茶でもなんでもやるしかないだろ。

もし俺が死にそうになったら絶対に逃げ出せよ」

「なっ」

「ま、死ぬ気なんかさらっさら無いけど」

それどころか楽しくて仕方ない自分もいるし。

多分これほどの殺気はあびた事がないからハイテンション？にな

ってる

んだろっ。

おもわず顔がほころぶ。

「あ

リイとシルフの目が丸くなる。
多分この状況で笑っている俺に驚いたんだろう。

俺は覇気をドラゴンに思い切り当ててる。
するとドラゴンは俺に目を向け、殺気も俺だけに向ける。

はは、殺気を向ける相手を選ぶのか。

っーことはリイとシルフは動けるってことだな。

「ほら早く行け」

「で、でも……………」

「シルフ」

「……………分かった」

「え!？」

「さすが、話が早い」

「……………まあ、ね。でも死なないでよ!」

「もちろん。特等席で見えな」

あ、特等席つつつても分からないか。

そんな事も思いつつ律義に待っているドラゴンを思い切り睨む。

シルフとリリィは気絶したままのリーアを抱えて走っていく。

「ぶっ」

俺が身体力を抜いた瞬間、ドラゴンが飛翔してくる。

おいおい、周りの木々もなぎ倒してんじゃないよ。森林伐採だ！

と思いつつ突進してくる事は分かっていたので身体強化の魔法を使い、

真上に跳んで回避する。

しかしドラゴンはそのまま急上昇して一定の距離を保ちながら三メートルはあろうかという火球を放ってくる。

「能力開始 支配対象認識」

とっさに神からもらった支配の能力を使う。

すると口が勝手に動き出した。

「発動」

瞬間、迫ってきていた火球がピタッと止まる。

………これが完全支配ってやつか。

「返すぞ」

俺が言つと火球はドラゴンに飛んで行き、派手な音を立てて直撃。しかしドラゴンは特に傷ついた様子も無く急降下し、尻尾を俺に振りかざす。

その一瞬で俺は武装色の覇気をまとい、同時に身体強化をさらに重ねがけして上から振り下ろされた尻尾を受け止める。

「は、軽いなあー！」

そして尻尾をつかんで思い切り地面に叩きつける。
そして追い打ちをかけようとするが、覇気で異変を感じ取りすぐに
距離をとる。

距離をとった瞬間ドラゴンから電撃が放たれる。

「雷も使えんのかよ……ッ!？」

とつさに横に飛んで回避する。
みると俺がいた場所が一メートルほど沈んでいた。

「はっや!？」

ドラゴンは猛スピードで移動して攻撃してくる。
目でなんか到底追い切れないほどで、覇気で先読みしてギリギリ
くらいだ。

多分シルフとリリイには何が起きてるか分からないだろう。

「気を付けて！そいつは怒るとスピードが上がるから！」

「もっと早く言ってくれ！」

何処からかシルフの声が聞こえたが言っのが遅いよ！
身をもって体験してるから！

……… つつてもこのままじゃちがあかないな。

よし。

「風林火山・疾きこと風の如く」

正直この世界の魔法とかどんなのがあるか分からん。
漫画とかアニメでの技を使おうかと思ったけど俺そんなに
知らないし……。

なら、今ここで造る！

「成りて、轟く」と雷鳴の如く」

ドラゴンの攻撃をよけながら詠唱。
一つ完成することに俺のスピードが速くなっていく。

「加えて、輝くこと光の如し！」

詠唱が終わると完全に俺の方が速くなった。
今の俺の速さは光にも匹敵するほどだ。

「

遅い」

俺は一瞬でドラゴンの懐にもぐり込み力を入れて蹴り上げる。
するとその巨体は空へと上がっていく。

そのあと残像を残すほどの速さでドラゴンの上に回り込む。
ドラゴンには急に俺が欠き消えた様に見えただろう。

そして武装色の覇気を思い切り右足に集中させ、
そのまま移動の勢いを利用して体を回転させ一気に右足を
ドラゴンの脳天に振り下ろす。

辺りに大きな音が鳴り響き、ドラゴンは地面に叩き付けられる。それでも衝撃を殺しきれず地面が大きく陥没する。

「まだだよ」

俺はドラゴンに降り立って手を当てる。

死念

瞬間、ドラゴンの鼓動が静かに停止した。

今のは、相手の心臓を無理矢理止める技。

でもこの技は身動きが取れない敵に手を当てないと発動させる事が出来ない。

動いてる者には絶対にできないという事だ。

||
||
||
||
||
||

||
||
||
||
||
||

「……………」

ドラゴンの目を見ている。
しかし、その目は何も映さない。
何の意思も感じられない。
俺は命を奪った。初めて。

……………でも何の気持ちもわいてこない。

命のやり取りは軽く見てなかったつもりだけど

。

結構意外だったな、何も思わないとはな。
俺も少し、壊れてきたかな。

初めての戦闘がラスボス級ってどうよ 2 (後書き)

誤字、脱字、感想等がありましたらぜひご報告下さい。
待っています。

なんとなく？

sideシルフ

……………おかしいな。

ドラゴンってこんなにあっさり倒せるんだっけ？
けど実際マサヤの前にはドラゴンが倒れている。

「……………信じられない」

「はい……………」

無意識に口から出た言葉に隣にいたリリイが答える。
横を見ると口をぽかんと開けたままのリリイがいた。

……………一般にドラゴンの討伐依頼というのは無いに等しい。
私もこれまでいるんな依頼を見てきたけどそんな依頼は無かった。
当たり前だろう。ドラゴンの依頼は国が軍を派遣するほど。
受託する様な人は命知らずの馬鹿かよっぽど腕に自信がある者だ

け。

……………自信があっても受託しないだろうけどね。
ギルドとしても死なれては困るのでよっぽどの事が無ければ依頼

の掲示板に
貼り出される事はない。

歴史上ドラゴンを単騎で倒したと言われるのは約300年前と聞
いた事

がある。が、それが本当なのかはだれも知らない。

ドラゴンは天災とそのまま同じ意味でもある。
狙われたら命は無い。

だったんだけど……………。

じゃあ、今日の前にあるのは？

現実？

幻覚？

まさかついに新しい扉を……………？

いやいやいや、まさかね。

…………… 思えばマサヤの方が規格外なのかもしれない。

鉄格子を刀？とかで簡単に斬ってたし……………。

考えてみれば鉄って斬れるもんなの？

それにバーウルフの時もそう。威圧して気絶ってなに？
ドラゴンが近づいてる事も分かってたみたいだったし。

ドラゴンと戦ってる時も変な事があった。
火球がマサヤに当たる！ と思っただけで急に止まって逆にドラゴンに
向かっていったし。

あと何あの速さ！

ドラゴンが電撃を放った後急に消えたと思っただけでマサヤも消えて
音だけが聞こえるだけだった。

しばらくした後マサヤの声が聞こえてきたんだけど……。

あの詠唱はなんなのよ？

私もある程度は呪文をしってるつもりだけどあれは聞いたことが
無かった。

そして詠唱が終わると同時にドラゴンが空に上がっていくのを見
た時は

………はい？って思っちゃった。

思わず目を擦ったわ、うん。その間に轟音が聞こえたと思ったら
ドラゴンが叩きつけられていた。

なんで？

どうして？

何が起きた？

その時から私の頭では理解不能の文字が駆け巡っていた。

………これは聞いてみるしかないわね。

マサヤの力が怖くないかって？ そんな事はどうでもいい！

人は強すぎる力とか異常ともいえる力を目にするると恐怖を覚えるらしい。

それはその力がもし自分に向けられたら？

破壊のために使われるとしたら？

と思ってしまうためらしい。

そんな不確定すぎる未来のためにそれを消そうとするみたい。

けれどそんなの知ったこっちゃないね。

人生なんでも前向きに！ それが私の親から教えられた事だから。

力が強いなら使わなければいい。

誰かのために使ってみればいい。

それでいいじゃん！

よし、なら早速聞いてみようか！

|| || || || || - - - - || || || || ||

ドラゴンを見ていたら少し離れている茂みからシルフとリリイが出てきた。

リリアも連れて。

「マサヤ！あんたすごいわね！」

何故かテンション高めでシルフが話しかけてきた。

「ドラゴンを倒してしまうとは思いませんでした……………」

リリイも啞然とながら話しかけてくる。

「ああ、うん。俺も思わなかった」

初めての戦闘がこんなにうまくいくとは。

戦闘方法が頭の中に入ってるとはいえ、身体が動くか分からなかったし。

けど戦ってみると意外にイケた。

恐怖はあったけどそれ以上に戦ってみたってのもあったし。

まあ、結果オーライってやつだな。

「ドラゴン……初めて見ましたがすごいですね」

「それよりマサヤ！あんたこんなに強かったのね！

人は見かけによらないって言うけど身にしみたわ……………」

「オイこら。そりゃどーゆー意味だ」

「え？だってマサヤ、強そうに見えないし」

「ですね。ひよろつというか、へろつというか。まるでモヤ

「おっとそれ以上は言うな」

「覇気で先読みしなくても分かるぞ。モヤシ、だろ？」

「別に否定はしないぜ！

「否定はしないけど言われたくない。トラウマがよみがえるから。

「っ！かこの世界にもモヤシってあるの？」

「シ」

「……………」

「モヤシってあれよね？細くて白いの」

まさか言つなと言われても言いきるとは。それは先読みできなか

った。

あとシルフ。詳しく言うな。ってかこの世界でもモヤシはそれか。

「……………ううん」

「あ、リーア」

くだらない話をしてたらリーアが起きた。

寝ぼけているのか周りをキョロキョロと見回して

「あ、おにいちゃん」

俺を見つけてにへらっと笑って近寄って来る。

……………なにこの可愛い生き物。

そして近くに横たわるドラゴンを見つける。

「……………?」

ドラゴンがよく分からないのかじーつと見て。

それが何か気付くとリーアの顔が泣きそうになる。

たぶん死んでもその迫力を出しているドラゴンに圧倒されたのだろっつ。

「ふえ……………」

「あっ」

俺はとっさに頭を手をおいてリアの頭をなでる。

小さい子はこれでおとなしくなるって言うけど実際どうなのか分からない。

「だいじょうぶだいじょうぶ。あれはおれがたおしたからな。

おそってこないからあんしんしろ」

「なんで全部平仮名に……………?」

「……………いいな」

シルフが何を言ってるのか俺にはさっぱり分からない。

地の文とかなんの事かしらないぞ。

あとリリィは何を言ってるんだ?

「お兄ちゃんが倒したの?」

「ああ。すごいだろ」

「 うんっ! 」

頭をなでて落ちついたのか笑顔でうなづく。
動作の一つ一つがかわいらしいな……………。

「さて、リアも落ちついたし。こいつどうするか」

「ギルドに持って行って金貨に変換してもらったら？」

ドラゴンの素材なんだから高値で買い取ってもらえるでしょ」

「そうなのか？」

「知らないの？ってあなたはギルド入ってないんだっ たわね」

「まあ」

「問題はどつすれば持ち帰れますかね……………」

「そつね。このままってのはもったいないし」

どつやらこのままにしておくって案は無さそうだ。

ドラゴン自体相当珍しいみたいだしそりゃしょうがないか。

「俺の袋に入れてけばいいだろ。この大きさなら大丈夫だ」

「そついえばそれがあつたわね……………」。

もうあんたには私の常識が通じないみたい」

「はい。驚くを通り越して呆れてしまいますね」

「おどろくをとおりこしてあきれてしまいますね」

「何気に失礼なこと言ってるな！

それとリーア、真似をしなくていいんだぞ」

俺はドラゴンの頭を袋の入口に近づける。

するとドラエ○ンのポケットよろしく吸い込まれていった。

……………すげえな。

それを見ていたシルフが呟く。

「……………マサヤならいいかな」

「なにが」

シルフが真剣な顔をしていたのでこちらも真剣な顔をする。

「私、マサヤの旅についてくー!」

シルフの後ろでドーンと爆発が起きた。……様に見えた。
……どういうこと?

「……………」

俺の不思議そうな顔をしてるのが分かったのかシルフは
説明を始める。

「いや、そのままの意味だけだね。
理由はあんたの強さの秘密が知りたいし、けど簡単に教えてくれ
そうにないし。
だったら教えてくれるまであんたと一緒に旅するってわけ」

「はあ。いや、それだけ?」

「え?いやべつに。私もいつか世界中を回りたと思ってたし」

「ふーん。いいよ別に」

「ほんとっ!?!?」

シルフが花咲くように笑顔になる。

そこまで嬉しいかね。俺と一緒に旅するのが。

「ちょ、ちょちょちょちょっと待ってください!」

そこで今まで聞いていたリリイが何故かあわてた様子で入ってきた。

「それは困りますっ!?!」

「なんで?」

「そ、それは……。と、とにかく困るんです!」

「?」

「……あ。リリイもしかして」

そこでシルフが分かったのかリリイを連れて俺から少し離れて話を始めた。

おーい、俺は。

「お兄ちゃん旅してるの？」

俺の横にいたリアアが服をくいくい引っ張る。
のびちゃうのびちゃう。

「まあな。急ぐ旅でもないけど」

「ふーん」

少しして話し終わったのか二人がこっちに来た。
なんでかりリイの顔が赤い。対象にシルフはにやにやしている。

「なに話してたんだ？」

「いや？なんでも」

気になるな……。まあ人の話を盗み聞きするもんじゃないしな。

「じゃあそろそろ行かないか？」

「そうね。リーアの村に早く行きたいし」

「……………そうですね」

「リリイ顔赤いけど。どうした？」

「なんでもありませんなんでもありません！」

「そうか」

「じゃあ、しゅっぱーっ！」

リーアの元気のある掛け声で俺達は歩き始めた。

なんとなく？（後書き）

読んで下さり有難うございます。

誤字、脱字、ありましたらご報告ください。

町に到着

そのまま歩くこと三時間くらい。

時計とか無いからどの位歩いたか分からないけど多分その位だ。

今は森の中を歩いてるわけだけどさすがに疲れた。

俺は普段そんなに運動をしないので体力はあまり多くはないんだ。

「なあ、そろそろ休まないか？疲れた」

「さすがモヤシ。この程度で疲れるなんて」

「お兄ちゃん体力無いなー」

「うるさい黙れ。シルフはともかくリリイとリーアはなんでそんなに疲れないんだ？不思議でならない」

最初に休まないかと聞こうと思ったが俺よりも年下のリーアが全く疲れた様子が無かったので意地を張って止めておいた。

しかしいつまで経っても村は見えてこないしリーアも平気そうだし俺の体力が先に無くなった。

「あたしは家の手伝いしてるからかな？」

「わたしはそれほど体力のある方じゃないと思うんですが……？」

「なん……………だと？」

「マサヤが体力少なすぎるんでしょ？よくドラゴンに勝てたわね」

「それは体力が尽きる前に倒しただけだ」

しかしリリイより体力少ないとは思わなかったな……………。
俺のふとももはパンパンだぞ。

「つく……………。村はまだかリア」

「うん……………、そろそろのはずなんだけど」

そろそろってどの位だ？

「あ、マサヤって旅の目的地とかあるの？」

早く着かないかなと思いつながら重い足を動かしていると
横を少しも疲れた様子の無いシルフが口を開く。

「いや、特に無いな」

「本当ですか！」

「ああ、うん」

「ならわたしの国に来てください！ぜひ歓迎します！」

何故かリリイが迫る様な勢いで言ってくる。
どうした？

「シルフ、どうする？」

「え、私に聞くの？」

「俺の旅についてくるんだろ？なら俺だけで決めるわけにはいかな
いし」

「そう。なら別にいいんじゃないの？」

「分かった。というわけでリリイ。よろしく頼む」

「ありがとうございます！」

そしてガッツポーズをするリリイ。

そんなに自分の国を見てもらいたいのか？

「あっ！！着いた！」

俺達が話してる間歩いていたらリアが急に駆け出す。見ると村というか町が目の前に広がっていた。今まで森を歩いていたので先が見えなかったのだが抜けるとすぐに町が広がっていたので少し驚く。

「すげえな……………」

想像はしていたが実際に見てみると感動するものがある。木で作られた建物、武器屋や洋服屋、それに魔法具専門の店も見える。

「そう？そんなに変わった所はないけど？」

「そうですね。普通じゃないですか」

「俺の村はこんなに大きくなかったんだ」

村ですらなかったけど。

先を見るとリアが町の入口らしい所で門番みたいな人となにやら話をしている。

「あ、お金とか必要か？町に入るのに」

「旅人とかは銅貨5枚。冒険者はギルドカードがあれば無料よ」

「わたしは旅人という事しておいた方がいいですね。でもお金がありません……」

「俺の金貸してやるからいいよ」

いつの間にか異空間の中に金貨、銀貨、銅貨が大量に入っていたんだ。

おそらくあの神が入れておいたんだろう。

最初に見た時は驚いたけどあのくだらないクイズで正解した時に一千万円獲得した事を思い出すと納得がいった。

「あれ？山賊に全部奪われたんじゃないの？」

「隠しておいた」

「……………何処に？」

「秘密」

秘密というと少し不満げという顔になる二人。

異空間とか言えるわけない。

話してる間に町の入口にたどり着く。

「このお兄ちゃんがあたしを助けてくれたんだよっ！」

「そうか……。ありがとうございます。助けていただいて」

衛兵のような騎士みたいな人にお礼を言われる。

「いえ、たまたまですよ」

「たまたまでも助けていただいた事には変わりありません。搜索願が出ていたので無事に見つかって良かったです」

「そうですか。こちらにも役に立てて嬉しいです。それで町に入りたいのですが……………」

「入国希望者ですか？ではギルドカードを見せていただくか、持っていないければ名前と一人銅貨5枚をお支払ください」

シルフはギルドカードを見せ、俺とリリイは銅貨十枚を支払う。

「はい、確かに。これで入国審査は終了です」

そして俺達三人は町の中に入った。

|| || || || || - - - - || || || || ||

しばらく数分歩いて、

「リア、家に帰ったらどうだ？親も心配してるだろ」

「うん。あ、そつだ！お兄ちゃんたちもウチに来てよ！」

「あー、いや、今はやめとくよ。ギルドに登録とか他の用事もある
し」

「そつ……………」

途端に悲しそうな顔になるリア。
俺はあわてて言いなおす。

「あ、終わったら行くから！それまで家で待ってな！
リアも親に会いたいだろ？家族水入らずで」

「……………うん！じゃあ待ってるからねー！」

言っただけリアは何処かへ走っていく。

……………家何処にあるか聞くの忘れてたな。

まあいいか。

「オホ」

「どうするの？」

「どうするんですか？」

「……」

「……」

「……」

「……」

二人にジト目で見られる。

二人の目には『どうするか決めてあるんじゃないのか』と言っているように見える。

「……気のせいだよな。」

「ギルドって何処にあるか分かる？」

「そこにあるじゃない」「そこにありますよ」

同時に目の前を指さすので見てみると、ひとときわ大きい建物が。看板にギルドと書かれており、遠くから見ても分かるくらいだ。
……………あれ？

「あ

……………」

「……………つぶつぶ

リリイは無言。目は半眼になっている。

シルフは吹き出し笑い。

つく、なんで気づかなかった俺！恥ずかしっ！

「き、気付かなかったただけだ！誰にでもあるだろ！」

「さすがにこれに気づかないのはちょっと……………」

「ええ、無いわね」

そりゃ無いでしょーね！自分でも馬鹿だと思うほどだ！

「つく、とにかく入ろう！」

「はい」

「顔が真っ赤よ」

シルフがにやにやしながら言う。ああ恥ずかしい……。

そして俺達三人はギルドの扉を開けた。

初めてのギルド

中は思っていたよりも広く、殺風景だった。中央に大きい円形のテーブル

があり、その周りに小さなテーブルが順番もなく並べられている。それに座っている人（冒険者と思われる）が思い思いの行動をしている。

酒を飲みながら談笑している者や腕相撲で力比べをしている者もいる。

そんな者のほとんどは扉が開いた時にこちらに視線を向ける。

すぐに元に戻す人が多いが残りの人は値踏みをするような視線でこちらを見ている。

まず先頭の俺に目を向けるが、その後続くシルフとリリイを見る。

「へー、こうなってるんだな」

「国のギルドはもつと綺麗なんだけどね。受付はこっちよ」

シルフが左側のカウンターに向かって歩き出すので俺とリリイは後をついていく。

受付はかなりの美系の青年で営業スマイルをうかべている。イケメンとか爆死すればいいのに……。

「イケメン爆発しろ……………」

「…………何を言ってるんですか？」

「え？あ、口に出た？」

「はい。イケメンとか言っていましたけど」

「あー、なんでもない。忘れて」

「はあ……………」

「どうやら無意識にしゃべっていたらしい。
でもリイの様子を見るとイケメンが何なのか知らないみたいだ。
横文字は通じないんだろうな。よかった。」

「ギルドによつこそ」

「彼を冒険者に登録したいんだけど」

「はい。ではいろいろと書いていただきたくはあるのですが、
ご自分でお書きに
なりますか？それとも代筆いたしますか？」

「どつするの？」

シルフが振り返って聞いてくる。
考えてなかったけどこの世界の文字など分かるはずもない。
代筆にしてもらおう。

「代筆でお願いします」

「あ、なら私が書くわ」

「分かりました」

青年は羽ペンとインクつぼ、羊皮紙をこちらに差し出す。
それをシルフが受け取り羊皮紙にさらさらと書いていく。
俺も気になって横から見てみるが何を書いているのか全く分からない。
い。

文字が書けないのは変じゃないかと思ったけれど
何も言われないのを見ると文字が書けないというのもおかしくない
んだろう。

「はい、ありがとうございます。マサヤ・クサナミ様ですね。
ではギルドについての説明をします」

「あ、私たちはテーブルで待ってるわ。終わったら声掛けて」

言ってシルフとリリィは近くの小机に歩きだしてしまった。

「すみません。説明をお願いします」

「はい。まずは冒険者のランク、および魔物のランクについてです」

説明はあの神に聞いていたので断るうと思っただが、細かい所は聞いていなかったの
で改めて聞くようにする。

「ランクはE〜SSまであります。冒険者としてのランクを上げるには

自分のランクの二つ上の依頼を二つ達成するしかありません。

マサヤ様は登録されたばかりでEランクですのでCランクの依頼を達成すればいいです。

しかしその依頼を失敗してしまうとランクが下がりますので挑戦する場合は十分に考える事をおすすめします。

次に魔物のランクですがこちらも冒険者と同じくE〜SSまでです。

しかし同じランクだとしても人と魔物では力の差がありますのでご注意ください。

……以上がランクについてです。ご質問は？」

「ないです」

ここまで聞いていたとおりだ。

「次に依頼についてです。」

基本依頼はご自分のランクより一つ上のランク、それ以下のランクしか

受ける事ができません。」

しかし先程も申しした通りランクを上げたい時には特例として二つ上の依頼を受ける事ができます。」

「質問」

「どうぞ」

「依頼には期間があるんですか？」

何時までに達成しなきゃならないとか」

「それについては依頼内容によりますね。」

期間が指定されているものもありますし、されていないものもあります。されているものであれば期間が過ぎると受ける事ができなくなりますが」

「なるほど」

「依頼については以上ですが他にご質問はありますか？」

「いえ、ありません」

「では依頼の受け方についてです。」

あちらの掲示板に依頼の紙がはってありますので選んでカウンタ―に

明日渡しますギルドカードと一緒に提出してください。」

あとですね、何人かの冒険者と組んでパーティーを作り一つの依頼を受ける事もできます。達成が難しそうな依頼は組んで挑戦することも一つの手ですね。

ギルドカードですが発行に時間がかかりますので明日以降来ていただければお渡しいたします。

紛失した場合は再発行いたしますが時間がかかりますし再発行料として

銀貨5枚かかりますので常に持っていて下さい。

………何かご質問は？」

「掲示板がもう一つあるようだけどそちらは？」

掲示板の様なものが離れた所にもう一つあるのを見つけたので聞いてみる。

そちらの掲示板の依頼を見てる人は二人しかいない。見聞色の覇気でその二人を探ると相当の強者だとわかる。

「あちらはS、SSランクの依頼専門の掲示板ですね」

「なんで分けてるんですか？」

「冒険者の中には依頼の内容だけ見てランクを見ずに受けてしまう人がいるんです。そのような場合大半は失敗してしまうか、依頼の途中で死んでしまう

んですよ。そんな事態を避ける為特に高いランクを分けてるんです」

「なるほど」

「他にご質問はありますか？」

「依頼を複数同時に受けることは出来るんですか？」

「いえ、それは出来ません。他にありますか」

「あ、もう大丈夫です」

「分かりました。これで説明は終了です」

言って青年は深くお辞儀をする。

「そうですね。いろいろありがとうございました」

俺はお礼を言ってカウンターを後にする。

シルフとリリイを待たせてるので見渡すと少し離れたテーブルで二人が座ってるのが見えた。

「んー？」

しかしよく見ると大の男三人に話しかけられている。

二人は迷惑そうにしている、シルフはイライラしているのが

ここからでも良くわかる。

対象にリリイは無言を貫いている。聞く耳持たずってヤツだ。そんな二人の態度にもかかわらず男三人は積極的に話しかける。よくあきないな……。

と、遠くから見ているとこちらに振り向いたシルフが俺に気づく。そして口パクで何か言う。

なになに……？

は・や・く・こ・い。早く来い？こいつらなんとかしろって？

……これは早く行った方がよさそうだな。多分相当イラついてる。

仕方なく近づいて男の一人の肩をたたく。

「あ？なんだ小僧」

「いや、その二人は俺の連れなんだけど」

「おまえ、さっき登録してたヤツか。ならちようどいい、

ちよつとこの二人貸してくんねえかな？明日には返すからよ」

「んー」

どうする？と視線に込めて二人を見る。

「嫌に決まってるでしょ、気持ち悪い」

「絶対に嫌です」

シルフは半眼でそう言って、親指を立てながら自分の首を掻き切る仕草。

リリイは腕を×にして首を振る。

「だってさ。どんまい。さようなら」

「おまえ……！ 調子に乗ってんじゃねえぞガキが！」

「先輩への口のきき方がなってねえな。少し教えてやろうか？」

……俺、いつ調子に乗った？

つかこれくらいで頭にくるとかカルシウム足りてないんじゃないかな
いか？

牛乳飲め牛乳。こっちにあるか知らないけど。

それにこんな騒いでるのに周りは止めようとしなない。

まさかとは思うがこんなことが日常茶飯事とかないだろな。

「まあ待てよ。おい小僧。痛い目みたくないならおとなしく
女を差し出せ。女の前だからって見栄を張ってんなら止めとけ。
どうなってもしらねーぞ？モヤシ」

三人のリーダー的な凶体のでかい男が言う。
そんなことより。

……………モヤシ？
今モヤシつつった？誰に？俺にか？

……………ああ。これにはぶちつと来たね。来ちゃったね。
俺にその言葉は禁句だ。悪気が無けりやいいけど。

「差し出せ？おまえ耳ついてんのかゴリラ。
嫌だつつつたたる二人とも。余所に行け」

「マ、マサヤ…………？」

「マサヤさん…………？」

俺は怒ると口が途端に悪くなってしまう。
我を忘れる事はないけど。

「……………それが答えか」

「それ以外になにがある」

答えると同時に俺の顔めがけて予備動作無しで右ハイキックを放
ってきた。

さすがに冒険者であるだけあってかなりの速さだ。
しかしキックをする事は知ってたので左手で受け止めそのまま掴
む。

抵抗できずに吹っ飛ぶと思っていたのか男は目を見開いて驚く。

「なんだこれ？遅すぎるし軽い」

俺は掴んでいた男の足を軽くまわす。

それだけで男はバランスを崩して引っ繰り返った。

「死ねっ！」

後ろから残りの男一人が拳を放ってきたのでしゃがんでよける。

そしてしゃがんだまま後ろに振り向いて足払い。

引っ繰り返って背中を打ち付ける。

このあたりでめんどくさくなってきたので覇気を三人に向けて放つ。

すると男達は同時に意識を失ったようで倒れる。

念のため気を失ってる事を確認しておく。

「はあ、すっきりした。行こうか」

「男達三人は？」

「気絶してるだけだからしばらくしたら目を覚ますし、ほっとしよう」

「そうね」

シルフは驚いた様子も無く答える。
覇気はバーウルフの時に使ったから何も思わなかったんだろう。

「あの、今は……？」

でもリリイは手を触れずに気絶させた事が気になるのか聞いてきた。

「あとで話すよ。冒険者登録も終わったしここを出よう」

「……そうですね」

俺達三人はギルドを出る。

その後しばらくギルド内では今の話で持ち切りになったそうだ。

………はあ。

初めてのギルド（後書き）

ここまで読んで下さり有難うございました。

師匠？ いや、先生か

「それでマサヤさん、さっきのは何ですか？」

ギルドを出た途端にリリイが聞いてくる。

「なんつーか、威圧して気絶させたんだよ。こつ……、ダァッ！つてかんじで」

「威圧……？ 殺気ではないのですか？」

「俺には殺気で人を気絶させる方が不思議だけど。少なくとも俺は威圧でだな」

「聞いたことがありませんね……」

「私もよ。それは誰でもできるの？ 修業を積んだりとかで」

おそらくそれは無理だろうな。なんか元からある人だけしか使えない

みたいだし。残りの二つなら鍛えれば扱えるんじゃないかな。たっけ……？

「それは無理。これは鍛えても使えない人は使えないらしいぞ。」

俺もいろんな人に会ってきたけど使えた人はいなかったし」

「なんだあ……。使ってみたかったのに」

「あ、でも別の覇気ならいけるか……？」

覇王色の覇気は無理でも残り二つなら鍛練すればいけるんだよな？
俺の覇気は神からもらったものだけど感覚でなら教えられるか？

…？

「覇気？ なんですかそれは？」

「あー、歩きながら話す。とりあえずリアの家に寄る前に
行っておきたい所はあるか？」

「なら武器屋に行っていていい？ 武器が無いと戦えないしね」

「確かに。俺はいいけどリリイは？」

「いいですよ。一度行ってみたかったですし」

「なら武器屋に……って何処にあるか知らないぞ」

「地図があるじゃない。門番の人にもらったわよ」

そっなの？ 俺にはくれなかったけどな。

俺はシルフから地図を受け取ってみてみる。

……うわっ！ 雑！ かるうじて何処になにがあるか分かるくらい。

「えっと……、これどっちが上だ？ ここにギルドがあるから……」

「見せてくれますか？ ギルドがここで、武器屋がここなので……。はい、分かりました。こっちですよ」

すぐに読みとったのか地図を見ながら歩き出すリリィ。
マジかよ……。あの雑な地図で良く分かったなあ。

|| || || || - - - || || || || ||

歩きだして少ししてシルフが覇気について尋ねてきた。

「それでさっき言った覇気？ って何？」

「ああ、うん。 　まず人には魔力と違う力があってだな」

「ほっほっ」

「それが覇気なんだけど……。普通は知らないままか、知っても使えずにいる人が大半なんだよ。」

「だからあまり知られてないんだな。使えないから忘れ去られたのかも」

「しれないけど」

「へえ……」

「覇気には 気配を読み取る見聞色、自身の鎧となる武装色、相手を威圧する霸王色
の三つがあるんだ。俺が使ったのは霸王色な」

俺は記憶を探りながら言う。

こんなだったよな……？

「さっき言ってた使える人が少ないってヤツね」

「そう。残りの二つならシルフとリリイでも使えると思うぞ」

「本当っ!?!」「そうなんですかつ!?!」

二人は凄い勢いで迫ってきた。顔近い!

「ちよっ……! 近い近い!」

「う、ごめん……」 「すみません……」

あわてて顔を離す二人。

しかしかなり使ってみたいのをお願いしてきた。

「教えてっ！ おねがい！」

「私にも教えて下さいませんか!？」

「そりゃ……、いいけど。俺教えるのへタだからな？」

「いいわよそのくらい！ 気合いと根性でどうにでもなるから！」

……。

それはどうなんだろうか。

「わたしもです！」

「リリースも？ 説明へタでもいいのか？」

「はい！ 勘でなんとか！」

……。

それもどうなんだろうな。

「やる気があるならいいけどな。がんばれよ」

「もちろん!」「はい!」

こうして二人に覇気について教える事になった。

……思ったんだけど覇気使えるだけでかなり強いよな。

師匠？ いや、先生か（後書き）

誤字、脱字を見つけたらご報告くれるとうれしいです。

化け神登場

「着きました」

先を歩くりリイが立ち止まったので前を見る。

目の前には武具屋らしき建物があった。

しかしかなり大きく、さきほど行ったギルドと同じ位だ。

武器だけでなく防具も一緒に売っているらしくこの町の中では一番大きいらしい。

「ふーん、ほー」

じつくりと見てみると先に二人が入っていくので、俺も扉を開けて入る。

店内はとても綺麗で武器防具共によく手入れされているのがわかった。

客もそれなりにいるが皆真剣な顔で選んでいる。

シルフもまた店内に入ってすぐ真剣な顔になり目当ての武器へ足を向ける。

リイもふらふらと武器などを見ながら何処かへ歩いていった。

……どこに行く気だ。

俺も何かないかと武器を物色してみた。
すこし見渡すだけでも大剣、片手剣、クロスボウ、小刀などが目に入る。

町一番の武具店らしくそれなりに有名な物も置いてあるらしい。

その中には手裏剣、鎖鎌、クナイ、撒き菱といった暗器もあった。
この世界にもあるのかと少し驚きながらも別の武器をみていく。

「ん？」

そんな中ふと目に入ってきた一振りの剣。

他の立派な剣に対してかなり古い物らしく、あちこち錆びていて、
周りの剣に隠れるようにして壁にひっそりと置いてあった。

気になったので近くにいた店員さんに聞いてみる事に。

「その剣ですか。実はかなり昔からあるみたいですよ。」

私が働く前からあったので詳しくは知りませんが。見劣りするよ
うなので

誰も買っていないみたいですね」

「へー、ちょっと持ってみてもいいですか？」

「はい、だいじょうぶですよ」

店員は剣を手に取り差し出す。

「どうぞ」

俺は剣を手を取って手触りを確かめる。

やはり所々寂れているのかざらざらとした感触がする。
鞘に入ったままだったので柄を持ち、ぬいてみる。

「うわ……」

「これは……ひどいですね」

そばで見ていた店員も思わず声がでてしまったようだ。

それくらい、刀身はボロボロだったのだ。

少し欠けている所があり、かなり汚れている。

「すみません、お客様。これほどとは思いませんでしたので……。
そちらはすぐに処分いたします」

あまりにひどいと思ったらしく、そんな事を言う店員。

……それはちょっともつたいないんじゃないか？

「……これ、買います」

「え！？ 買われるんですか？」

目を見開いて驚く店員。こんな見えそつにない剣を買うとはさすがに思わなかったらしい。

「はい。 まだ使えるんじゃないかなと」

「そ、そうですかね……？」

「なんとかかりますよ。 それで、いくらですか？」

「本当は銀貨50枚なんですが、そこまで酷いとは思いませんでしたし。」

他に買って下さる冒険者もいなさそうなのでタダでいいですよ

「マジでー!？」

「……………？ まじ、とはなんですか？」

「あ、いえ……。 本当にいいんですか」

「はい」

「すみません、ありがとうございますっ！」

俺はタダにしてもらった感謝と少しの罪悪感を同時に言ってみた。

「……あやまると同時にお礼を言われたのは初めてです」

「でしようね」

「……」

「でも本当にありがとうございますっ」

「いえいえ」

そのあと俺は得をした気持ちになりながら店員と別れた。

|| || || - - - || || ||

そのまま歩いていくと、気になる看板を見つけた。

く 修練場 く

「修練場？ なんだ？」

気になったので看板の方に歩いて行くと、少し大きい広場の

様な所にでる。そこには何人かの冒険者らしき人達が武器を振り回したり、

組み手をしたりしていた。

案山子もありそれに武器を叩いている者もいる。

他に藁で作られた簡単な等身大の人形もある。

ここは剣の試し切りなどが出来る場所らしい。

ちょうどいい。さっきの剣を試し切りしてみるか。

そう思い俺は近くにあった藁人形に近づいて剣を抜く。

そして斜め上から斬りつける。

「っふ！」

しかし剣は藁人形を半分まで斬ったところで止まってしまっ

……切れ味悪っ！

まあ、力任せに斬っただけなので止まってもおかしくないけど。

そんな事を思っていると

『……………ご主人、下手くそ』

「っっっっっ」

『あ、聞こえるの………？』

いきなり頭に中性的な声が響いてきのでおもわず大きい声を出してしまふ。

周りの人が何事か、とこっちみてくるのでなんでもないです、とごまかす。

しかし今の声は……？

「誰だ……？」

俺は誰かが魔法で直接頭に話しかけているのかと周りを見るがそれらしい人は見当たらない。

あれ……？

魔法ならそのくらい出来るとおもったんだけどな？

『「……」』

しかしまた声が頭に響いたので静かに首を動かす。

「あつれー？」

『「………違う。ご主人の手」』

「手………？」

手を見てもさっき買ったボロい剣があるだけ……………ってまさか
!?

「剣……………か？」

『……………そう。やっと気付いた』

「気付いたて。分かるワケないだろが。で、おまえはなんだよ？」

『……………声出さなくても大丈夫』

「ん？」

『頭の中で思えばいいから。ご主人、一人でぶつぶつしゃべってる
ようにみえるよ』

「なにっ」

あわてて周りを見ると何人かがこつちをみて話している。
頭のいたい人、とか話してるんじゃないーだろーな。

つーかそれを早く言ってほしかったよ、俺としては。

『……………こんな感じでいいか？』

『……………うん』

『……………』

『……………』

こいつもしかして……………無口？ 自分から話そうとしないな。

『で、おまえは何だ？ 精霊とか？』

『……………ううん。化け神』

なにソレ。

『……………？』

『……………知らないの？ 化け神』

『ごめんなさい知りません』

『……………しょうがないなあ』

声から呆れてる様子が伝わってくる。すみませんね無知で！

『……………九十九神は知ってる？』

『あれだろ？ 古い物に神とかなんやらが宿ったヤツ』

『……………うん。化け神はそれが強くなったもの』

うん。全くわからんね。

『……………つまり精霊』

『なるほど。分かりやすい例えだ』

『……………化け神は持ち主の魔力を借りて力を使うんだけど』

『けど？』

『……………ご主人、魔力無い』

『……………』

『……………あれば本当の姿になれるのに』

『無くて悪かったな！？』

確かに俺には魔力が一切ないらしい。

確かめたわけじゃないけどあのアホ神がそう言ってたし

この化け神も言うんだから本当に無いんだらうな。

……だが！

だがしかし！！

俺には真力があるはずだ！　なんか魔力の代わりになるとかいう。実際に魔法使えたし。

『ふっ』

『……？』

『俺にはな、真力というモノがあるんだよ』

『しん……りょく？』

『ああ。魔力の代わりになるからそれ使えないか？』

『……さあ？』

『わかりでか。まあ、真力を使うとしてどうやればいいんだ？』

『……うん。ぼくにソレを流し込む感じ……？』

あ、僕っ子。

『……なんで疑問形？　前の持ち主とか使ったんじゃないのか』

かなり古そうに見えるから誰かが使ってたとしてもおかしくない。

『……先代達はぼくが話しかけても気づいてくれなかった』

『気付かない？ 相性が悪かったとか？』

『……たぶん。だからご主人が初めて』

『ほう。俺が初めてか。悪い気はしないな』

『……ぼくも気づいてくれて嬉しい』

……うん。そう言ってくれてこっちも嬉しいけど
なにせ声が平坦だからいまいちうれしそうに聞こえない。

『そりゃ光栄だな。で、話を戻すけど流し込む感じだっけ』

『……そう。できる？』

『努力はするけど保証はできない』

『……保証はいらないから結果を出して』

『……おっ』

でも流しこむとかさっぱり分からないんだけど。
とりあえずイメージで体の中にある大きな塊を剣に送ってみる。

すると握っていた剣が大きく光りだし辺りをおおう。

……まぶしっ！ 俺は思わず目を閉じてしまう。

しばらく経って光がやんだので目を開けると目の前にちっさい女の子が俺を

眠そうな瞳で見上げていた。ついでに言うと握っていた剣が無くなってる。

銀髪蒼眼で結構かわいい。

「……」

「……」

「……」

「……ご主人」

「お、おまえ……さっきの剣か？」

「うん………眠い」

「ね、ねむい？」

「……ねる」

言って女の子は俺にぼすつと抱きついてきた。
瞬間、女の子が透けて行きやがて見えなくなる。

「あれ！？ どこ行った!？」

『…………ご主人の中』

また頭の中に声が響く。
俺の中って…………どこだよ。

『…………呼びたい時は声掛けて。寝てるから』

「あ、おい…………」

『…………』

返事が無い。どうやら寝てしまったようだ。

…………なんだっただんだ一体。

化け神登場（後書き）

読んで下さりありがとうございました。

武器は買わないほうがよかった。

ボロい剣を買って見たら少女が付いてきた。

そんな摩訶不思議な事を体験した俺は、やる事が無くなったので
修練場を後にしてシルフを探している。

「どーこっかなつと……………お、みつけ」

片手剣のコーナー付近で突っ立っているのを見つけたので
近づいて声をかける。

「おう、シルフ」

「ん？ ああ、あんたか……………はあ」

なんだこいつ。

ふりむいて俺を見た途端溜息をつきやがった。

俺の顔はそんなに残念か。

「人の顔を見て溜息をつくな。で、どうしたよ？」

「うん、武器を買おうとしたけど私って今お金持っていないのに気づ
いたのよ……………」

「そついや山賊に金ぜんぶ盗られたつってたっけ。」

「ふーん、金なら俺が貸そつか？」

「えー？ だつてあんたもお金持って……るん……だっけ？」

「少しは。貸してもいいけど返せよ」

「……抜け目ないわね！ でも、ありがとう」

「いってそのくらい」

「聞くとシルフが買いたいののは片手剣だそつだ。」

「値段を聞いてみると金貨二枚。」

「マジか。そんなあつたっけ……？ とこつそり異空間を
除くとジャラジャラあつた。」

「それを二枚取り出してシルフに渡す。」

「ほい」

「……今何処からだしたの？」

「ひみ「秘密以外で答えて」……えー？
じゃあ、いつのまにか手の中にあつた」

「……面白い冗談ね」

「ははは」

……というワケで無事シルフは武器を買つことができた。

そのあと、もう用事はないという事なので次はリリイを探す事に。

「で、リリイはどこだ？」

「さあ？ 初めて来たみたいだったしそこらへんにいるんじゃない？」

「ここです」

「うわっ！？」 「ひゃっ！？」

いきなり後ろで声がしたので驚く。

ふりむくとリリイが不思議そうな顔で立っていた。

気配をまったく感じさせないとは………できる！

「なにを驚いているんですか？」

「いや、急に声をかけてくるから………」

思ってたんですよ。さっきもリリイはどこだ？　なんて言われた時はどろしよつかと思いましたが」

「……」

ホツとした様に話すリリイを見ながら俺は思った。

……俺、これから見聞色の覇気を全開にしておくようにしよう。

そして、武器は買ったし他に寄る所もないとの事なのでリーアの家に行こう、
というふうになった。

「さっ！　行きましょうか！」

あと何故かシルフのテンションが高い。
なんでかすごい嬉しそうだ。

「シルフ、どうした？」

「いやあ、やっぱり武器があるといいわね！
安心するといつか、なんといいつか」

なるほどなるほど、……全然分からん。

「まあ、そんな事は捨てといて。リアの家はどこだ？」

「捨てないで！　せめてとっておいて！」

シルフうるさい。

「わたしは聞いてないのでわかりませんね」

「そうか……、どうしようか」

「マサヤさん探査魔法使えるんじゃないんですか？
脱出の時に使ってたじゃないですか」

「ああ、あれね……」

実は覇気なただけだな。まあ、今更そんなこと言ってもどうしようもないし。

そもそも見聞色の覇気って特定の人も何処にいるか分かるっけ？

……とりあえず物は試しだ。俺は覇気を使ってみた。

……おお、分かる分かる。覇気って便利。

「やってみるもんだ。こつちだな」

リーアの家の場所が分かったので、その方向に向かって俺は歩きだした。

二人も後ろからついてきた。

「リリイ！」

「はい」

「リリイ？」

「……はい？」

「リリイ！？」

「……………はい？」

「リリイー！ー！」

「…いんじ」

「……………」

シルフなんなの？

リリイリリイとうるさいので思わず叱ってしまった。
ってか武器あるだけで変わり過ぎだろ。

「だまれ」

「……………リリイ」

シルフを静かにしたい

歩いてる途中でふと眼を向けると屋台が並んでいた。
ちよつと腹が入ってきたので二人に声をかける。

「ちよつとあれ買ってくる。二人も食べるか」

「あれ？ あ、食べる食べる！」

「わたしもお願いできますか？」

「わかった」

屋台に近づくと肉を売っているおじさんが声をかけてきた。

「にいちゃん！ ちよつと食ってかねーか。うちのはうまいぞー！」

みると焼き鳥みたいなのが焼かれていた。
たしかにおいしそうだな……。

「じゃあ、四本ください」

「まいど！ ほね」

渡されたのでお金を渡して離れる。

「どれがいいのかわからなかったけど、これでいいか？」

「ありがとうございます」

「私はこれ好きだからいいわよ、ありがとう」

二人は受け取るとおいしそうに食べ始めた。
リリイは少しずつ、上品そうにたべている。
それに対してシルフをみると……。

「あれっ？ もうない」

すでに無くなっていた。

俺でさえまだ半分なのに……。

「うんっ。やっぱりおいしい」

そしてリリイが食べ終わるのを待って、またリーアの家に向かって歩き始めた。

世界についての説明、その他もろもろ

さわがしいシルフをリリイに任せて歩くこと数分。
どこにでもある二階建ての一軒家にたどり着いた。

「ここにいるの？ リーアは」

「多分な」

しかしこの中からリーアらしき気配とよわよわしい気配を感じる。
このもう一つの気配は一体……？
不思議に思いながら俺は木製のドアをノックする。
すると中からリーアと思われる声が聞こえてきた。

「……はい、どちらさまですか」

「おう、俺だ」

「お兄ちゃんっ!？」

声とともにドアが開きリーアが顔をのぞかせる。

「ふえ……」

そして俺達の顔を見るとくしゃりと顔をゆがめた。
よく見ると目に涙がたまっている。

「う、うえええええええん!!」

「ええ!?! 俺にかした!?! そんなに顔こわい!?!」

いきなり泣き出すリアにあたふたする俺。

いや、しょうがないじゃん? 女の子に泣かれたのなんて初めて
だし!

どうすりゃいいのかさっぱりわからん……。

「落ちつきなさいよ、あんたは……」

やけに落ちついた様子でリアと視線を合わせるシルフ。
おまえが何故そんなに平気なのか不思議だ。

「大丈夫? なにかあったの?」

「お、おかあさんが……」

「お母さんが? どうしたの?」

やさしい声色で聞くシルフ。
今俺はシルフがそんなやさしくなれる事に驚き。

「体調が悪いみたいで……」

「悪い？」

「う、うん」

涙と鼻水でぐしゃぐしゃの顔で答えるリア。

反してる間に落ちついたのか、今はさっきより少し泣きやんでい
る。

「とにかく家の中に入りませんか？」

「そうね」

俺達は家の中に入った。

床の間のような所につくと、一人の女性が布団の上で寝ていた。
しかし息が荒く、顔も赤い。意識も朦朧としてるのか俺達が来ても
反応があまり無い。

「普通の風邪じゃないのか？」

「さあ……？ 私もあまりこういうのは詳しくないし」

「でも半年くらい前から具合が悪そうだったし……」

リーアの父親は冒険者だったのだが、かなり前に行方不明になり
それきり

帰ってきてないそうだ。

リーアの家は貧乏で、二人で生活するのでやっとだとか。
そんな中で薬を買う余裕も無く。

しかたなくリーアは風邪に効く薬草を探りに行った時に
山賊にさらわれたらしい。

こんなちいさいのに行動力があるな。

「医者とかに診せなかったのか？」

「医者？ 医者ってなに？」

「え？」

まさか……医者ってこの世界には無いのか？

「とにかく、こういうのを治す魔法とかないか？
それか使える人」

「ああ、治療魔法士の事？ いることにはいるけど……。
あまりおすすめはしないわね」

「なんで？」

「そんなことも知らないの？」

治療魔法士つてのは人数が少ないのよ。普通の治療魔法士は国直属がほとんどだし。

それに頼むとしてもかなりのお金が必要なの」

「じゃあどうやって病気とか直してるんだ？」

「薬を買うか、自然に治るのを待つくらいね」

治療魔法士、つかえねー。

なんのためにいるんだって話だ。力もってるんなら使えよな。

「なるほど。ただの風邪にしても半年も治らないのは聞いたことないですね。もしかしたら何かの病気かもしれません」

「ええっ！ 母さん、病気なの……？」

「あくまで可能性の話ですよ。そうと決まったわけではないです」

とにかく様子をみようという事になって、リーアだけでは不安という

こともあり俺達三人は家に泊めてもらう事となった。

どこに泊まるかなんて決まってなかったし、ちょうど良かったしな。

シルフが夕食を作った後（味はそれなりだった）、俺、シルフ、リレイ、リーアの

四人は母親のそばで看病をしながらくつろいでいた。

なにかしたいとは思いが、母親はずっと眠っているからそっとしておいたほうが
いいだろうな。

そこでふと俺はこの世界の事がよく知らないと気付いて話を振ってみた。

「なあ、俺この世界の事とか詳しく知らないんだけど誰か教えてくれないか？

 覇気を教えるかわりにさ」

すると三人の顔がこいつ何を言ってるんだという顔になった。

「あんた……。世間知らずにもほどがあるわよ。

マサヤの村ってどうなってんの？」

「俺に聞かれても」

「まあまあ。この世界といってもどんな事を教えてほしいんですか？」

「全部」

「……」

「……ねえ、本当は記憶喪失じゃないの？ それか何処かで頭でも打った？ それか腐ってるものでも食べちゃったの？」

なにこいつ失礼だな。

とはいえ、俺も逆の立場だったらそう思うかもしれない。

「いいだろ、そんなことは。それより教えてくれ」

「私めんどいからパス。リリイお願い」

「はいっ。任せましたっ」

何故か喜んで説明しだすリリイ。

そんなに教えるのが好きなのか？ どっかの先生とかになればいいのに。

……ああ、そついやリリイって王女だっけ。じゃあ先生は無理だな。

「まずそうですね……。この世界は【ラクトル】といいます。

世界の名前はだれが付けたのか分かりませんが」

あの地図を見てください、といって壁を指さす。
そこにはこの世界の地図と思われる大きな紙があった。

「あれが、現在明らかになっている世界です」

「明らかになっている？」

「はい。人類は世界すべてを調査できたワケではないんです。
よくて……六割ほどじゃないでしょうか」

「どうして調べられないんだ？ 魔法使えばいけるんじゃない？」

「そうですね。実際わたし達の先祖もそうしたみたいです。
でもそうしなかった。いえ、できなかつたんです。魔物が強すぎ
て」

「強すぎて？」

「はい」

リリイは立ちあがって壁に貼ってあった地図を持ってきた。

「見てください。すべて海に囲まれていますよね？」

確かに地図をみると二つの大きな大陸があり、一か所を除いて周りが海に囲まれていた。

「けどこれは普通なんじゃないか？ 地球もそうだったし。」

「この海の内こう側にもう一つかなり大きな大陸があると言われてるんです。」

「けれどその大陸に行って戻ってこれた人はいません」

「行った人はすべて死んだ……」

「はい。その大陸に唯一繋がっているのがこの道、精霊の道です。」

「まあ、今は封鎖されていて通れませんがね」

「実態のない精霊だけが通れるから精霊の道ってか。」

「そして今いる大陸ですが、ミリッド大陸といます」

「リリイが二つの内、少し小さい大陸を指さす。」

「ミリッド大陸は五つの国が支配しているんです。」

「フルミア帝国、テストリア帝国、ニルミス帝国、レイガス帝国、フィルタス帝国」

「最後のはリリィの国か」

「はい。他にも小国は中立国などがありますが、強大なのはこの五つですね」

そのうち、フィルタス帝国とニルミス帝国、フルミア帝国が同盟を結んでいて

残りの二国が同盟を結んでいるらしい。

「戦争とかしてないのか？ 同盟を結んでるんだろ？」

「戦争は百年前からしてないらしいです。今は冷戦といいますが、お互いに牽制し合ってるんみたいですよ」

よかった。戦争の真つただ中だったらヤバかったな。
少なくともどっかの国に取り入れられて戦争に駆り出されてたか
もしれないし。

「そしてもう一つの大陸がルーベリア大陸といいます。
こちらの大陸では三つの国で構成されています。

グルム戦国、キルリア祖国、ロック帝国。

この三国で同盟を結んでいるんですよ」

「はー、なるほどね」

「次は……そうですね。世界最強と謳われている八人について話しましょうか。」

ある程度に国の戦力を一定にするため一国に一人、八王と呼ばれる人がいるんです」

なにそれかつこいいい。

「今最も冒険者のSSランクに近いとも言われているんです。わたしは見た事はありませんけど」

「え、王女のリリースでも見たことないのか？」

「はい。その人達は主に極秘の依頼をしてるみたいですけどね。詳しくはわかりません」

海賊漫画の七武海みたいなもんか？
かなり強いという事だけは分かるな。

「あと魔物の事ですが……これはさすがに知ってますよね？」

いや、あまり知らない。

「ギルドで聞いたから大体は」

「そうですね。なら大丈夫です」

「ああ、そう」

他に聞いておきたい事ってあったか……？

「そうだそうだ。お金の事がよくわからないだった」

「お金ですか？」

「おう。銅貨が何枚で銀貨になるとか、そういうの」

「……ふう」

え、なに今の溜息は。

「まず、銅貨が一番低いです。

銀貨は銅貨百枚分、金貨は銀貨百枚分に相当します」

「はあ」

「そのくらい……ですかね。他に聞きたい事はありますか？」

「そのくらいかなあ。いや、ありがとう」

「いえ」

俺は創造で水の入ったコップをリリィに手渡した。
しゃべりっぱなしでつかれただろうし。

「ありがとうございます」

こうして、リリィの何故なに講座が終わった。

治療開始

その夜。

俺は魔法に関する本を読んでいた。

その中でも治療について詳しく書かれているものだ。

創造で直せばいいと思ったけど、症状とかがわからん。

普通に治れって言えば治るか？

どっちにしる情報があったほうがいいと思ったから、

何かないかとリーアの家の本を見てみた。数冊しか本が無かったが、その中に治療の本があったのには驚いた。

病気とかは普通の人には治せないから持つてても意味がないと思うんだけどな。

ページをばらばらとめくっていく。

「ぜんぜんわからん……。風邪じゃないのか？ もう」

ってか、半年も具合悪そうだったって……。

身体の調子がよくないけど、娘に心配かけたくないから元気に見せてたんだろうな。

それが魔力でなんとか病気の進行を遅らせたとか。

けれど、さすがに限界になって倒れたとかかな。

「ダメだ！ 専門的な事しか書いてないから何を言ってるのかさっぱり
わからんぞ」

本を閉じて本棚にもどす。

『……ご主人』

その時、急に頭の中に声が響いた。

「は！？ あ、ああ…… おまえか……。
おどかすなよ、もう」

『……さつきから……治療の本、見てるけど……？』

『ああ、これか。病気？ らしき人がいるんだけどな。
なんとか治せないかとおもってな』

『ぼくなら……治せる……かも』

『は？ おまえが？ なんで？』

『……ぼくは再生と破壊をつかさどる……炎の化け神だから』

『ほのお？』

再生と破壊？ 炎って燃やすとかそういうんじゃないのか？

『再生の青い炎……と、すべてを燃やしつくして破壊する地獄の業火』

『おおう……』

『……ぼくはそれがつかえる』

『なんか、かなりすごそうなんだが……』

『……うん、まあね』

再生の炎は不死鳥とかで聞くな。
でも青い炎はあまり聞いたことがない。

『……とりあえず、患者をみせて』

『患者……患者か』

リアの母親の寝ている部屋に入る。
寝ている所を起こさないように静かに。
ちなみに、リア、リイ、シルフは三人一緒に別の部屋で寝ている。

けど真っ暗であまりよく見えないな、目が慣れれば大丈夫だけど。

『……よく見えない。明るくして』

「……サンライト」

小さな太陽ができて（熱くない）辺りを照らす。

そして、別の光が出てきて、おさまると、眠そうな眼をした女の子が立っていた。

「……参上」

「はあ……」

「……どうしたの？」

「いや、べつに。そこに寝てる人だよ、患者」

ととととと歩いて、リアアの母親をみる女の子。
今は眠そうな眼ではなく、真剣な眼をしている。

……そういや、まだ名前を聞いてなかったな。

まあ、後でいいか。

「……ほう、これは……」

「！なんかわかったのか？」

「……パーキンソン病」

「パーキ………なんて？」

いきなり意味不明な言葉を発した女の子。

「……身体がだんだん動かなくなる病気」

「動かなく………？」

「……少しずつ少しずつ麻痺していくから、最初の半年は違和感を感じるくらい」

「半年をすぎると？」

「……急に身体を動かしにくくなって、倒れる」

「……なるほど、つまり今の状態だな」

「……そう」

話しながら険しい目で母親を見ていく女の子。
……しかし見るだけで病名がわかるとか……。

「で、なおせるのか？」

少し緊張しながら聞く。

「……もちのろん。簡単」

「……」

「……？ ご主人」

急に黙ったのを不思議に思ったのか。こちらを向く女の子。

「なあ、今のもちのろんって……なんで知ってるんだ？」

「……ご主人の頭の中にあっただ……」

「そ、そうか。俺の中にな……」

「……うん」

うっ、うっくん。覗かれるのはあまりいい気はしないな……。それに、覗かれると神の事とか知られちゃうかもしれない。

「なあ、あまり頭の中をみるのは控えてくれないか？」

「……？ ……どうして？」

「そ、そりゃ………ためにならない情報とかあるから………かな？」

「ええ………、おもしろい、のに」

お、おもしろい……。おもしろいとききましたか………。

「それでも！ あまり覗かないように！ ダメ！ 絶対！」

「……………うん」

しびしび、といった感じで納得する女の子。
かなり間があったが、これなら大丈夫だろう。

「よし、じゃあ病気を治してくれるか？」

「……………はいよ」

女の子の手の上に、小さな青い火の玉が現れる。

近くにおいても全く熱くなく、やさしいような、安心するような感じがする。

あれが再生の炎なんだろう。

「……きれいだな」

「……ありがとう」

「ん？」

「……？」

なんで俺は今 お礼を言われたんだ？

不思議に思いながら女の子を見ると、火の玉を母親の心臓あたり
に
ゆっくりと押しこんでいく。

火の玉は身体の中に吸い込まれ、入って行った。

「……これで大丈夫」

「……今のでいいのか？」

「……うん。再生の炎の種を心臓に入れたから」

「……う、うん？」

「……それが芽吹けば身体中に広がって病気を飲み込んでいく」

「……ほ、ほう」

「……意味わかってる？」

「いや、まったく」

正直、八割は分かってない。

「まあ、最後は治るんだろ？」

「……うん」

女の子はしかたないなあ、はあ……といつぶんたじろなぞう。

「……一週間で病気は無くなる」

「そんなに早く？」

「……ま、ね」

「そうか。ありがとな、治してくれて」

女の子の頭に手を置いて礼を言う。

ちょうど手を起きやすい場所に頭があるんだ。

「……べつに……いい」

言っと、俺に抱きついて来て、だんだん姿がかすんでいく。
やがて見えなくなった。

……抱きつくのはなにか意味があるのか？

『……じゃあ、ねる』

『お、おう……また寝るのか……。おやすみ』

『おや、すみ……』

なににせよ、これでリアは大丈夫だろ。
俺はサンライトを消して、寝るための部屋に向かう。

あ。名前聞くの忘れた。
ま、いいか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2820t/>

異界って楽しいか？

2011年9月19日18時47分発行